

青木周蔵の渡独前の修学歴 (3)

——萩城下における蘭学の修業時代——

森 川 潤

(受付 2013 年 4 月 25 日)

はじめに

三浦玄明の父玄仲は、萩藩領の僻地にすむ地下医にすぎないが、「翻訳書ニ依リ少シク泰西文明ノ學術ヲ解セシ」ひとであった。青木周弼が、天保10(1839)年に萩藩で最初の藩内居住の西洋医として藩医に登庸されて以来、萩藩蘭学の基盤はととのえられていた。長男の玄明が医業をつぐためにオランダ語を習得し、蘭書を繙くのは当然のなりゆきであった。豊後中津での「福沢諭吉」との出会いも、玄明を蘭学の修学にむかわせた要因のひとつであろう。

三浦玄明は、文久2(1862)年末に豊前中津から親元にもどり、翌文久3(1863)年には、萩城下におもむく。萩城下における玄明の蘭学の修学過程は、3つの段階にわけられる。第1は、玄明が能美隆庵の学僕としてオランダ語を習得する段階である。玄明は、豊後中津においては、オランダ語の訳書を繙読しただけであり、萩城下ではじめて「文典」、すなわちマートシカッペイ文法書によりオランダ語をまなぶ。第2は、好生堂に入学をゆるされ、医生として修学するだけでなく、萩藩医の名門青木家に養嗣子としてむかえられる段階である。第3は、慶応3(1867)年夏に長崎遊学の藩命をうけるまでの段階である。

玄明の蘭学修学期についても、『青木周蔵筆記』（以下、『筆記』と表記する）¹⁾に依拠せざるをえない。『筆記』は、青木周蔵が第二次山県内閣の外務大臣に再任され、ヨーロッパから帰国した明治31(1898)年、50代なかばにさしかかったところに起稿したものである²⁾。第一から第二十七まで、補遺をくわえ、全29章からなる。『筆記』第一は、青木周蔵の生誕から長崎遊学までの時期をしるしたものである。30年以上もまえの過去を回顧するために、記憶違いや事実の誤認が散見される。さらに、伝記には、第1に自己探求や自己認識への欲求、第2に過去を回想することがもたらす快楽、第3に自己の正当化への欲求が反映される³⁾ことも勘案しなければならない。

『筆記』第一には、そうした観点から、いくつか疑念をいだかせる記述がみられる。第1に、玄明は萩城下に蘭学の修業のためにおもむくが、なにゆえに青木塾に入門しなかったのだろうか。父玄仲は、青木周弼と弟の研蔵がいとなむ「私設学校」に入門させるために玄明を萩城下におくりだしたはずである。第2に、『筆記』は能美隆庵の学僕時代には紙数をさくが、好生堂における修学状況や青木家への婿入りの経緯については詳細をかたらないのは

どのような理由からであろうか。『筆記』が好生堂における修学状況に言及するのは、「青木周弼及ヒ其弟研蔵」、「烏田圭蔵氏」の指導をうけたこと、「文典」のほかに「単ニ一ノ医書」しか繙読しなかったこと、村田蔵六の命令によりクリミア戦争に関する蘭書の数行を判読したことの3件だけである。第3に、『筆記』には、玄明は青木家の養子にむかえられ、青木周蔵に改称すると、「歐洲留学」を企図し、ただちに日野宗春、竹田祐伯といった好生堂の中枢にはたらきかけただけでなく、藩庁に願書を提出し、木戸孝允に斡旋を要請したとされるが、好生堂医師の身分で実際に「歐洲留学」の願書を提出したのでであろうか。こうした点において、『筆記』第一はかならずしも真実をかたっているとはいえない。

本稿は、山口県文書館所蔵の「毛利家文庫」などの資料と照合し、『筆記』第一の記述を吟味しながら青木周蔵の萩城下における蘭学の修学期を再現することを課題とする。なお、「蘭学」は「おらんだノ學問。又、おらんだノ語學」（『新編大言海』）というふたつの意味をもつ。緒方洪庵の適塾が主眼としていたのは「おらんだノ語學」、すなわちオランダ語の習得である。こうしたばあいには、「蘭学」を「オランダ語」と表記する。象先堂では、塾生は伊東玄朴が蒐集した「醫學書理學書兵書を始めとし文學歴史地理法律の書」⁴⁾を閲読する。象先堂は、オランダ語で記される西欧の学術書、および技術書をまなぶ蘭学塾である。このばあいには、「蘭学」、「西欧の學問」、「西欧の学術」などと表記する。

I. 能美隆庵の学僕

三浦玄明は、文久2(1862)年末に豊前中津から親元にもどる。翌文久3(1863)年には、萩城下におもむく。その理由について、『筆記』はつぎのようにしるしている。

豊前ヨリ帰郷ノ後、旧友中ニハ尚ホ漢学ヲ修ムヘク勸告スル者アリシモ、予ハ断然此等ノ勸告ニ耳ヲ假サス、蘭学研究ノ初志ヲ固執セリ、然レトモ長人ニ対スル世上ノ嫌疑ハ益々旺盛トナリシニ由リ、笈ヲ他藩ニ負フコトハ固ヨリ不可能ナルヲ以テ、予ハ藩ノ城下ニ至リ、醫家ニ就テ蘭学ヲ修メント決心セリ

故郷にもどると、さらに「漢学」をまなぶようすすめる旧友もいたが、玄明は「蘭学研究」を「初志」であるとして、それをつらぬこうとする。萩城下におもむいたのは、「長人ニ対スル世上ノ嫌疑ハ益々旺盛トナリシニ由リ」、藩外に修学の間をもとめることができないためである。それが事実であるとすれば、玄明が萩城下におもむいたのは、文久3(1863)年6月以降になる。

萩藩は、尊王攘夷運動の急先鋒として、文久3(1863)年5月にアメリカ、フランス、オランダの艦船を砲撃する。翌6月、突然の大咯血で急死した緒方洪庵の通夜の席にあらわれた村田蔵六は、福沢諭吉に「此世の中に攘夷なんて丸で氣狂ひの沙汰ぢやないか」⁵⁾と嘲弄される。6月以降には、萩藩が欧米の艦船を砲撃したことが江戸にもつたえられ、萩藩の呼び

とが白眼視されることもあったであろう。

しかし、玄明が萩城下におもむいたのは、文久3（1863）年4月以前、萩藩が馬関攘夷戦をひきおこすまえの時期である。この点については後述するが、玄明が萩城下におもむいたのは、萩藩の人びとが江戸や大坂では冷遇されるからではない。江戸や大坂にでむくまでもなく、萩城下で蘭学の修学の間をもとめることができるからである。

郷関をでるとき、玄明は父の玄仲から懇懇とさとされる。

当時、萩ニ於ケル蘭方医トシテハ学問治術共ニ青木周弼及ヒ其ノ弟研蔵両氏ニ匹敵スル者ナク、且父子齊シク要路ニ立テ、藩立医学校ノ教頭及教授タリシニ由リ（中略）其ノ私設學校ニ入りテ修學スヘク勸諭シタル

嘉永3（1850）年2月以降、萩藩では藩領全域で牛痘接種を実施することになる。萩城下での牛痘接種の実施にさいしては、青木周弼、赤川玄悦、久坂玄機の3名の藩医が引痘掛を命じられる。周弼の弟研蔵は、全藩規模で牛痘接種を実施する佐賀藩にでむき、痘苗をもちかえただけでなく、みずから小児に痘苗を植えつける。さらに赤川玄成、竹田庸伯、曾祢玄育、長野文琢、佐方玄琳、烏田良岱、松村太伸の7名が臨時引痘掛に任命される。藩領全域で牛痘接種を実施するとすれば、好生館の引痘掛や臨時引痘掛のスタッフ10名では対応することはできない。そこで、「一宰判中陪臣地下醫之内、巧者之者兩三人宛」、すなわち陪臣や地下医のなかから医療知識や医療技術にすぐれたものを宰判ごとに2、3名づつえらび、かれらに「好生館御用達」を命じ、郡中の「医業取締」にあたらせる⁶⁾。代官や領主は、ただちに医者^{みつお}の選抜をはじめ、種痘医として当職所に登録する。熊毛宰判^{みつお}三丘村の領主宍戸孫四郎は、同年4月、つぎのように届けでる⁷⁾。

三浦玄仲

山根壽庵

右兩人江領分於宜引痘被_レ申付_レ度被_レ存候間、於_レ醫學館_レ傳授被_レ仰付_レ被_レ下候様、此段定被_レ成_レ御沙汰_レ可_レ被_レ下候以上

宍戸孫四郎内

毛利家の一門家老の三丘宍戸家は、領地のはるか西方の吉田宰判^{あつ}の厚保村や松屋村にも給地をもつ。松屋村は周蔵が生まれ育った土生村の東に隣接するが、地下医^{あつ}がいない。玄仲は、往診をたのまれれば、松屋村などの近隣の村にもでかけていたであろう。三丘宍戸家当主の孫四郎は、玄仲が給地に居住する医者であれば、ただちに玄仲をえらんだはずである。しかも、玄仲はすでに舟木宰判の藤曲村に転居していた。そのために、当職所への登録が遅れたのであろう。玄仲は、嘉永4（1851）年1月に種痘医として当職所に登録される。一介の地下医にすぎない玄仲は、「宍戸孫四郎家来」、すなわち陪臣医として萩藩医学校で実施される種痘法の伝習に参加する。領主が選抜した種痘医である。種痘の講習にあたったのは、種痘掛

の青木周弼、赤川玄悦、久坂玄機である。青木研蔵もくわわったであろう。なかでも周弼は、その中心的な存在であり、萩藩随一の蘭学者である。実弟の研蔵も、新進気鋭の蘭学者である。

玄仲は、萩藩医学校での伝習に参加し、能美洞庵が萩藩医学校の主催者であり、青木兄弟が萩藩医の西洋医として牛痘接種において指導的立場にあることを知っていた。青木塾ではおおくの塾生が修業していた。青木周弼の伝記には、82名の塾生が列挙されているが、実数は「遙かに多かつた」といわれる⁸⁾。萩藩領から入門したものの中には、地下医がおおく、陪臣医、「勘場醫」や「御茶屋醫」といった下級の藩医の名も散見される。そのほかに、江戸、京都、大坂、九州から笈を負うものもいた。なかには、緒方洪庵の義弟である憶川虎之助、洪庵の師家にあたる中天游の子の耕介の名もみられる。周弼は、洪庵とは江戸の坪井信道塾の同門である。当時、昵懇の間柄にある蘭学者のあいだでは、たがいに門人をあずける習慣があった。周弼も東条英庵、日野宗春などの門人を大坂の緒方塾にあずける。玄仲は、「笈ヲ他藩ニ負フコトハ固ヨリ不可能」であるからではなく、その必要がないために、青木家で修業するよう言いふくめ、玄明を萩へおくりだしたのである。玄仲は、戊辰戦争にもかりだされ、「診察兼調合方」馬関海峡から豊前に従軍する⁹⁾。

当時、萩藩では侍医と御番医をあわせ80家ほどの藩医がいた。藩主の侍医、すなわち御側医は御匙役、御添匙役、御鍼役、外科役にわかれ、定員は8名程度である。そのうちの数名が藩主の参観や領内巡見などに扈從する。御奥医は藩主の奥向きを担当する。好生堂の教授スタッフも藩医であるが、侍医や御奥医を兼務するものが多い。そのほかに、交通の要衝に藩の宿泊施設として設置された御茶屋に配置された医者や各宰判に設けられた勘場に勤務する勘場医も藩医である¹⁰⁾。青木周弼のように一介の地下医が一代雇の藩医に召し抱えられ、やがて譜代にとりたてられるのは異数のことである。通常は藩医の身分は嫡子雇により世襲される。

当時、萩には、能美家と青木家という医家の大家があった。

能美家は、洞庵から嫡子隆庵へと引き継がれる時期にきていた。洞庵は、寛政6(1794)年に藩医友庵の長男として三田尻上町^{うわまち}に生まれる。その父友庵は、第10代藩主^{なりひろ}齊熙の御側医である。洞庵は、道三流本道医の友庵のもとで修業する。道三流とは、曲直瀬正盛(道三)とその子玄朔が、田代三喜が明からもちかえた金・元時代の医学を体系化した漢方医学の一派である。のちに後世家^{こうせい か}と呼ばれる。洞庵は、文政10(1827)年2月、嫡出雇により御添匙医として召しだされ、同13年には第11代藩主^{なりもと}齊元の御側医に任じられる¹¹⁾。天保2(1831)年に友庵が没すると、家督を相続し、天保8(1837)年には襲封したばかりの第13代藩主^{よしちか}慶親(のち敬親)の御側医に任じられる。その後、洞庵は第10代藩主齊熙の御側医をつとめた賀屋恭安^{たかちか}とともに医業成立定掛を命じられ、天保11(1840)年9月、萩八丁南苑の御茶屋内の空室で医

書の会読をはじめめる。それが萩藩医学校の淵源である。洞庵は、天保10(1839)年、同12(1841)年、同14(1843)年、弘化2(1845)年、同4(1847)年、嘉永2(1849)年の6度、参覲に随従し、江戸の文人墨客ともまじわる。洞庵は、藩主の侍医を兼任しながら、嘉永2(1849)年1月に医学館頭取役を命じられ、以後、「防長医学界の泰斗」¹²⁾として萩藩の医学教育と医療行政を主導する。文久3(1863)年2月によりやく隠居願が聴許される。天保8(1837)年から四半世紀にわたり、主任侍医として萩藩の「医事衛生」に参与したことになる¹³⁾。

洞庵は、道三流本道医にすぎないが、洞庵の推挽により萩藩医に登庸された坪井信道は、「自然斎」、すなわち洞庵についてつぎのようにしるす¹⁴⁾。

寮友能美子艾、山陽之良医也。王父由庵先生、學術精到、救_レ人之病苦_レ、常若_レ不_レ及。人至_レ今称_レ之考友庵先生。余及_レ知_レ之、亦寛厚之長者也。始唱_レ西洋医方於我藩。遠近翕然湊_レ其門。子艾受_レ業繼_レ志、道益精術益行。今防長之間、洋医之盛、復過_レ列国者、実能美氏之力也。

洞庵の父友庵は、學術が緻密であり、ひとの病苦をすくうことにつとめる。萩藩において、はじめて西洋医学を唱導する。その門には各地から入門者が蝟集する。その嫡子^{しがい}子艾、すなわち洞庵は友庵の遺志をうけつぎ、西洋医学の定着浸透につとめる。新進気鋭の西洋医青木周弼を藩医に登用するよう推薦し、萩藩医学校の学科課程のなかに西洋医学をとりこんだのは洞庵である。防長二国において西洋医学が盛行しているのは洞庵のおかげである。友庵にしても、洞庵にしても、みずから蘭書を繙読することはなかったが、積極的に西洋医学の導入にとりくみ、防長に西洋医学を普及させたのは、能美家にほかならない。

隆庵は、文政8(1825)年2月、洞庵の長男として三田尻上町に生まれる。ちかくの越氏塾にかよい、都講の今津桐園^{どうえん}のもとでまなぶ。天保13(1842)年4月、洞庵にしたがい、家族とともに萩に移住し、藩学明倫館祭酒の山県太華に師事する。明倫館在籍中、詩文会の結成に参画する。隆庵は、のちに医家としてよりも、文雅のひとつとして知られるが、すでにその片鱗がうかがわれる。隆庵は、父祖以来の家職をつぐために、20歳のころから、おそらく明倫館でまなぶかたわら、父の洞庵や青木周弼のもとで医学をまなぶ¹⁵⁾。隆庵は、医学修業をはじめてから10年もたたない嘉永5(1852)年には、嫡出雇として召しだされ、藩主慶親の養嗣子にむかえられた支藩徳山藩主毛利広鎮^{ひろしげ}の十男広封^{ひろあつ}（のちの元徳^{もとのり}）の侍読兼侍医に任じられる。安政6(1859)年9月には御添匙医に任ぜられ、以後、世子広封の江戸出府に扈従する。文久3(1863)年2月には家督をつぎ、藩主慶親の侍医に任ぜられる。

青木家は、地下医の出でありながら、西洋医としてはじめての藩内居住の藩医に登用された周弼から、実弟であり、養嗣子でもある研蔵へと代替わりする時期をむかえていた。周弼は、享和3(1803)年正月、周防国大島郡和田村の地下医青木玄棟の長男に生まれる。文化11(1814)年に周防国三田尻在住の萩藩医能美友庵の学僕となり、後世方^{こうせいほう}の医学をまなぶ。文政

3 (1820)年に大坂に遊学し、文政10(1827)年ころまでとどまる。大坂では、翻訳書により西洋医学をまなぶ。その後、父玄棟を手伝い、医業に専念する。しかし、やがて地下医の仕事にあきたりず、天保2(1831)年ころ、江戸にのぼる。江戸では、旧師能美友庵の紹介により江戸の「三大西洋家」のひとりである坪井信道¹⁶⁾の安懷堂に入門する。のちに信道の紹介により同門の緒方洪庵とともに宇田川玄真(榛斎)にも師事する。天保6(1835)年春、病氣療養のため郷里にもどる。天保8(1837)年7月には研蔵をともない長崎へおもむき、1年ほど長崎に滞在する。周弼は、ふたたび故郷で医業にたずさわるが、天保10(1839)年2月、洞庵と地江戸両仕組掛の村田清風の推挙により一代雇の藩医に登庸され、年米25俵を支給されることになる。周弼は、妻タネ、弟研蔵とともに萩城下にうつり、絹織屋町に居をかまえる。嘉永3(1850)年6月には譜代藩医にとりたてられ、翌年正月には御添匙医、安政2(1855)年8月には御側医に補任される。萩藩医学校の運営にもかかわり、嘉永2(1849)年正月には医学館会頭役、万延元(1860)年10月には好生堂助教、文久3(1863)年4月には好生堂教諭役に任じられる。蘭学者としては、文久2(1862)年4月に幕府の西洋医学所初代頭取の大槻俊斎が病没したとき、西洋医学所取締の伊東玄朴と取締補の林洞海から俊斎の後任として頭取に就任するよう要請される¹⁷⁾。周弼は心がうごくが、高齢を理由に謝絶する。周弼が江戸の蘭学者のあいだでもたかい評価を得ていたことがうかがわれる。

研蔵は、文化12(1815)年に周弼の12歳年少の弟に生まれる。研蔵も、父玄棟、周弼と同様に三田尻の萩藩医能美友庵のもとで医学修業をはじめたとおもわれる。天保2(1831)年4月には豊後日田の咸宜園に入門し、広瀬淡窓の弟旭莊のもとで漢学をまなぶ。天保6(1835)年に兄周弼が江戸から帰郷すると、研蔵は周弼のもとでオランダ語をまなび、医学を修業する。天保11(1840)年に萩城下八丁南苑の御茶屋において医書の会読がはじまったとき、研蔵は周弼の門生として原書の会読にくわわる。天保14(1843)年には江戸におもむき、伊東玄朴の象先堂に入門する。同門には、佐賀藩の大石良英、津和野藩の池田多仲、萩藩の東条英庵などがいる。研蔵は、嫡子のいない周弼の養子になり、弘化4(1847)年2月に嫡子雇により西洋書翻訳御用掛に補任される。嘉永3(1850)年6月には西洋原書頭取役に転じる。研蔵は、当初は異賊防禦の職務にたずさわるが、嘉永5(1852)年2月には好生館都講役、文久3(1863)年4月には御添匙医に任じられ、世子附になる。元治元(1864)年3月には周弼の後任として好生堂教諭役に補任され、同年6月には御側医に任じられる。研蔵は、江戸遊学中から「西学は当時若手之内海内ニ指折之由ニ御座候」といわれ¹⁸⁾、当代屈指の蘭学者という評価があった。青木家は、医家としては新興の家柄であるが、萩藩では随一の蘭学者の家系である。

萩城下において「蘭学研究ノ初志」をつらぬこうとすれば、青木塾に入門しなければならない。玄明は、父玄仲から青木周弼の蘭学塾に入門するようすすめられる。しかし、玄明は能美隆庵の学僕になる。『筆記』によれば、その理由はつぎのとおりである。

青木兄弟ハ夙ニ蘭学者トシテ其ノ名聲廣ク他藩ノ間ニ喧傳セラレタレハ、其ノ門生ハ皆ニ長人ノミニ止マラス、他藩ヨリ来學スル者亦少ナカラス、此ノ如ク門生ノ多数ナルハ却テ修学ニ不便ナルノミナラス、校内ノ規律甚タ弛緩ナリトノ世評モアリタル

玄明が青木塾に入門しなかったのは、他藩からも塾生がおとづれ、塾内にあふれかえっているために修学に支障があるだけでなく、塾内の規律もゆるんでいるという風評があったためである。風評で判断するのは、入門する意思がなかったからであろう。

周弼は、萩城下にうつったとき、絹織物町に居をかまえる。玄明が萩城下におもむいたころには、周弼は近傍の南古萩町に新築移転し、もとの家には研蔵がすんでいた¹⁹⁾。周弼が嘉永4(1851)年に侍医に補任されたのち、研蔵が蘭学塾の指導や患者の診療にあたっていた。青木兄弟の蘭学者としての名声は他藩にもとどき、青木塾にはおおくの塾生がいた。しかし、それが「修学ニ不便ナル」要因、すなわち塾内における学習活動に支障をきたす要因であるとはいえない。緒方洪庵の適塾にみられるように、おおくの塾生が切磋琢磨することにより学習効果はたかまる。

研蔵は、弘化4(1847)年に嫡出雇により西洋書翻訳御用掛に任じられて以来、役につき、文久3(1863)年4月には世子附の侍医を命じられていた。玄明が萩城下におもむいたころには、周弼は療養中であったが、「当時の蘭学塾は何れも塾主が自ら教へるのではなく、塾頭しつかが確しりしてゐるかどうかで其塾の価値が定まるのであつた」²⁰⁾。塾内の規律がゆるんでいたとすれば、人望がある塾頭がいなかったということになる。「校内ノ規律甚タ弛緩ナリ」という風評は、玄明が青木塾をさけた表面的な理由である。それは方便にすぎない。

玄明は、萩城下江向えむかいにある「名門能美氏」の家に寄寓し、学僕としてオランダ語をまなびはじめ。隆庵は修学時代に周弼のもとでオランダ語を学習し、嫡出雇として召しだされたのちには蘭学を教授したこともある。安政2(1855)年9月、好生館内に「台場築造、砲術、諸器械、其外洋製便利之事柄」を研究する西洋学所が開設される²¹⁾。このとき、隆庵は、田原玄周、松島瑞益とともに西洋学師範に任じられる。瑞益が西洋兵学研究のため長崎遊学を命じられたために、隆庵が「醫書」と「文法書」を、玄周が「兵書類」を教授する²²⁾。

『筆記』には、隆庵の語学力についてつぎのようにしるされる。

蓋シ能美氏ハ蘭學ノ造詣探シト云フニアラサルモ、汎ク漢籍ニ通曉シ蘭學モ文典程度ノ書ハ易々之ヲ解シ得ルノ學力ヲ有スルカ故ニ、予ハ先ス之ニ就テ文典ヲ學ヒタリ、然ルニ当時學問講習ノ方法タル、今日ノ如ク順序整然タラサルノミナラス、能美氏ハ侍医タルカ故ニ公務多忙ニシテ授業ニ専ラナル能ハス、從テ予ノ學業亦遅々トシテ進歩スルコト能ハス、唯竊ニ憤慨スルノミナリキ

隆庵は、「文典」には通じているが、「蘭學ノ造詣探シト云フニアラサル」人物である。このばあい、「蘭學」は「おらんだノ學問」（『新編大言海』）、すなわちオランダ語によりつた

えられる西欧科学を意味する。しかも、蘭学の教授法に熟達しているとはいえない。玄明は、隆庵のもとでオランダ語を習得することは困難ではないかとおもいはじめる。しかも、侍医として「公務多忙ニシテ授業ニ専ラナル能ハス」。

隆庵は、洞庵の隠居にともない、文久3(1863)年2月に家督を相続し、4月には藩主附となり、10月には御側医に任ぜられる。萩藩は、4月に攘夷実行を決議し、藩庁を山口に移す。藩主慶親は、4月16日に山口にうつる。隆庵は藩主に扈従し、山口におもむく。玄明も隆庵に随従する。隆庵は、侍医として日常的に藩主に接し、藩主が出駕すれば扈従しなければならない。

玄明が萩城下におもむいたのは、隆庵が萩城下に在住していた文久3(1863)年4月中旬以前のことである。ちなみに、藩主慶親が敬親に改名し、萩城にもどるのは、元治元(1864)年10月3日のことである。御側医の隆庵は、つねに藩主に扈従する。玄明は、攘夷実行いご、「長人ニ対スル世上ノ嫌疑」がふかまる文久3(1863)年の後半ではなく、春から初夏のころに萩城下におもむき、萩城下に居住する隆庵の学僕になったとおもわれる。

隆庵は、^{おうめいしや}嚶鳴社のメンバーであり、そのメンバーでもある周布政之助、北条瀬兵衛（のち伊勢^{さかえ}華）、来原良蔵、松島瑞益（剛蔵）といった「当時要路ニ在ル諸士」と頻繁に往来していた。嚶鳴社は、天保14(1843)年8月に明倫館居寮生の周布政之助が北条瀬兵衛とともに結成した詩文会であった²³⁾が、安政4(1857)年に萩城下河添に活動の拠点を移したのち、嚶鳴社と名づけられる。発起人のひとりである北条瀬兵衛は嚶鳴社について、つぎのように述べている²⁴⁾。

毬[○]呼[○]嚶[○]鳴[○]社[○]之事[○]予[○]豈[○]忍[○]復[○]言[○]乎[○]。憶予歳廿四五。在萩城明倫館事。時館内主張經說。弗理餘事。予與周布公輔謀、創此社。專講溫史八家文。兼攻辞章。久之入社者十数人。相會則討論講究。援古徵今。

瀬兵衛が24、5歳のころ、在籍していた明倫館では、^{けいせつ}經說、すなわち「經書の中に説かれている説」（『日本国語大辞典』）を主張し、そのほかのことを論じるという風潮はなかった。瀬兵衛は、周布政之助とはかり、嚶鳴社を結成する。もっぱら史記や唐宋八家を講じ、詩歌や文章を排撃する。入社するものは十数人におよぶ。会集すれば、討論講究し、「援古」、すなわち古を引いて証とし（『字通』）、「徵今」、すなわち現今の事実にあてはめて確かめる（『日本国語大辞典』）。嚶鳴社は、当時の明倫館における「經書の訓詁を専攻して殆ど餘事を修養せず」²⁵⁾といった気風を憂慮し、歴史をまなび、^{こめだこれかた}時局問題をも講究しようという趣旨から組織されたものである。熊本藩でも、国老^{ながざね}米田是容が天保12(1841)年ころに横井小楠、下津久馬、元田永孚などとともに「講學」を組織し、「記誦詞章ニ拘泥シテ修己治人ノ工夫ヲ知ラス」という藩校時習館のあり方を批判し、「人才を生育し政事の有用に用ひん」と主張したことがある²⁶⁾。この研究会は、藩政改革派である実学党の起源となる。周布政之助が嘉永5(1852)

年に江戸方政務役添役に抜擢されたように、社員のなかには藩政の要務につくものも多くなり、嚶鳴社はより現実的な政策検討集団になる。

玄明は、隆庵に扈從するうちに嚶鳴社の人びとと面識ができる。『筆記』は、当時の状況について、つぎのようにしるす。

周布政之助、毛利登、北条瀬兵衛氏等、当時要路ニ在ル諸士ハ執レモ能美氏ノ學友ニシテ、彼我屡々往来スルノ故ヲ以テ、予モ亦知ラス識ラスノ間ニ政府ノ先輩諸氏ヲ識ルニ至リ、種々ノ政談學話ヲモ聞クコトヲ得タルニ由リ、自然其ノ鞭撻ヲ受ケタルコト少ナカラス、之カ為メ速ニ自己ノ目的ヲ達セントスルノ念慮、益々興奮シ、殆ント之ヲ抑制スルニ苦メリ

隆庵の「學友」である「要路ニ在ル諸士」の「政談學話」を聞いたことが、玄明が現実の政治に関心をいだくようになる契機になった、というのである。しかも、そのために、1日でもはやく「自己ノ目的」を達成しようと発奮するが、「興奮」を抑制することができなくなったというのである。『筆記』には、「目的」という表現がなんだかキーワードとしてあらわれる。「目的」とは、「国家ニ益スル學問」、すなわち「政法ノ學」をまなび、「政治ニ参与スヘキ位置」を獲得することを意味する。『筆記』によれば、玄明が「目的」をはじめて意識したのは、「満十六歳ニ達セシ時」、四書の素読ができるようになったころである。そのころ、玄明は家職である医術をまなぶことを厭わしくおもうようになったという。「政法ノ學」は、のちの青木周蔵がプロイセンにおもむいたのちに出会った学問である。周蔵は、1870(明治3)年冬学期にベルリン大学法学部に学籍登録し、「政法ノ學」をまなぶ。その後、外交官をへて、外務次官、外務大臣として政界にはいる。『筆記』は、50代なかばにさしかかったころに起稿したものである。青木周蔵は、医者という職業を忌避し、そこから逃かれようという想いを「政治ニ参与スヘキ位置」という現在の到達点に仮託し、その地位を獲得することを「目的」と表現したにすぎない。嚶鳴社の人びととの交遊は、「目的」につながる過程のひとつまでである。

「目的」を達成するために、オランダ語をまなぶという着想は、豊後中津に遊学していたさいに得たものである。オランダ語は、西欧の学問をまなぶための手段にほかならない。玄明は、文久2(1862)年に誠求堂の塾主橋本忠次郎(塩巖)にさそわれ、かれの親戚筋にあたる福沢諭吉の実家をたずねる。老母^{おじゅう}於順と忠次郎との会話を聞き、玄明は諭吉の生き方に共鳴し、ふたつの点で諭吉を指標にすることになる。ひとつは、語学の習得である。諭吉は、中津藩の下級藩士の家に生まれ、「封建門閥」の重圧にさいなまれていたが、みずから習得したオランダ語や英語によって封建的身分制度の壁を突き破り、幕臣にとりたてられる。語学は、封建的身分制の障壁を越える武器になりうる。村田蔵六も、地下医の家に生まれながら、蘭学を兵学や軍事学へとおしひろげることによって倒幕運動の先陣をきる萩藩の軍事部

門の責任者という地位を獲得する。対外的危機意識がつよまれば、つよまるほど西欧の近代科学の扉をひらくために外国語への需要がたかまる。

もうひとつは、海外への視線である。玄明は生まれ故郷の土生村や藤曲村から遠望できる海を隔てた世界にあこがれていた。諭吉をとおして、漠然としたものながらオランダが属する西欧世界を垣間見る。それは玄明が知る蘭学とは異なる新鮮な学問を用意する世界でもある。少なくとも福沢諭吉との邂逅により、玄明の脳裏には、語学の学習、海外渡航という選択肢が刻み込まれる。しかし、海外渡航あるいは海外留学は、非現実的な、あわい憧憬にすぎない。

オランダ語の習得にふみこんだ玄明は、軍事的な緊張のたかまりがすすむなかで、軍事的な動向とは対蹠的な方向にむかう。萩城下で修学する玄明の友人のなかには、奇兵隊に入隊するものもあり、入隊をすすめるものもいた。玄明は「一兵卒タルハ予ノ望ム所ニアラサル」として謝絶する。奇兵隊は、下関砲撃事件において無力さを露呈した藩正規軍を補強するために、高杉晋作が文久3(1863)年6月に結成した「陪臣輕卒藩士を不選同様に相交り専ら力量を貴ひ堅固之隊」²⁷⁾である。その後、遊撃隊、御楯隊、鴻城隊、膺懲隊、八幡隊といった、下級藩士、農民、町人が結成する諸隊が生まれる。藩医のなかにも、奇兵隊などの諸隊にくわるものもあらわれる。藩医赤川玄悦の子憲介は、はじめ医業をつぐために、万延元(1860)年4月に好生堂に入学するが、文久3年には志士からなる膺懲隊を創設し、総督になる。藩医馬島春海の子甫仙、馬島春海も奇兵隊に参加する²⁸⁾。

玄明は、安政4(1857)年、手習いをおえ、萩藩永代家老の福原家が家臣の子弟のために領地の宇部村中尾に設置した郷学菁莪堂に入門する。菁莪堂の記憶は、ふたつの点で玄明の心に刻み込まれる。ひとつは、封建的身分制への嫌悪感である。もうひとつは、軍隊としての武士団やその構成員である武士にたいする拒絶反応である。安政5(1858)年、条約問題や將軍継嗣問題をめぐり政局が極点に達する。萩藩が全藩軍事化をすすめるなかで菁莪堂も軍事訓練を中心とした施設に変貌する。陪臣とはいえ、福原家家臣の子弟が武闘集団としての性格を剥き出しにすると、玄明は「階級制度ノ桎梏」を痛感させられる。その体験が玄明に戦闘集団としての武士団や武士に拒絶反応をいだかせるようになる。萩藩は、文久3(1863)年8月18日の政変により京都から追放される。福原家当主の元僞は、萩藩の勢力回復のために、おなじ萩藩家老の国司信濃、益田右衛門介とともに兵を率いて上京し、元治元(1864)年7月、禁門の変をひきおこす。敗走し、帰藩した元僞は、自刃を命じられる。

青木周蔵は、ベルリン大学法学部在籍中の明治6(1873)年1月16日、岩倉使節副使の木戸孝允の推薦によりベルリン公使館駐在の外務一等書記官心得に補任され、はじめて官途につく。一時的に帰国することはあったにしても、外交官としてドイツに駐在する。青木周蔵は、明治18(1885)年に帰国を命じられ、12月10日に外務大輔に補任され、同月に発足した内閣制

度のもとで外務次官に横滑りする。青木周蔵の周囲には、志士として尊皇攘夷・討幕運動にかかわった軍閥政治家があふれていた。明治22(1889)年12月にはじめて外務大臣に起用されるが、それは第一次山県内閣の外務大臣であった。山県有朋は、奇兵隊で頭角をあらわし、明治政府では軍閥政治家として手腕をふるい、政界に山県閥をきずく。青木周蔵は、「山縣井上の系統」に属するが、「未だ青木周蔵子の最も多く學者ぶるに如かざるなり」と評される²⁹⁾ ほどに、文官として地位をきずいたことを誇らしげにかたっていたのであろう。典型的な尊皇攘夷運動の志士であった伊藤博文は、文弱であるとして青木周蔵を罵倒する³⁰⁾。

若い時分にいづれも志士を以て自ら任じてゐたので、女子などは振り向きもしなかつたものだ。獨り青木は近所の子守女と遊んで嬉しがってゐたので、吾輩等はいつか彼れに制裁を加へてやらうと思つて機會を狙つてゐた。すると青木が馬小屋の向ふに馬草を置いてある二階に、例の子守と一緒にあがつてゐることを見付けた。好機逸すべからずとて、ソツト梯子を取ら除けてやつた。暫くして二人でおりやうとすると、梯子がなくなつてゐるので、忽ち狼狽し始めた。そこで一向がワーツとはやし立てた。さすがの青木も眞赤になつて助けてくれとあやまる。小守の背中で小供が火の付くやうに泣き出すといふ始末、さんざん油を取つてやつた、その時、青木はこれから女子とは遊ばないと誓つたので、好い加減にして梯子をかけてやつた。

青少年期のふたりには接点はない。伊藤博文がつくりだした寓話にすぎない。青木周蔵は、志士あがりの藩閥政治家にまじわりながら往時を回顧する。そこには、現在から照射された過去が描きだされる。その過去は、現実とはあざやかなコントラストをなしていた。

萩藩は、攘夷実行の期限がせまる文久3(1863)年4月、「一旦兵端を開絶交之上にては外國の長技も御採用之思召も難_レ被_レ行届_一候」として、井上聞多（馨）、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔（博文）、野村弥吉（井上勝）の5名を留学生としてイギリスに密航させる。かれらに課されたのは、「外國へ渡航し學校へ入込修業」し、「外國の長技」、すなわち「航海業」を修学することである³¹⁾。留学生のなかには、伊藤俊輔のような農民の出のものもいた。玄明の胸中には、海外留学が非現実的な夢ではないという思いが芽生えていた。そのためには、外国語、すなわちオランダ語を習得しなければならない。

玄明は、嚶鳴社の人びとと接することも楽しみであつたが、「予ノ學業」、すなわちオランダ語の學習はすすまなかつた。能美隆庵は、もともと文雅のひとであり、家職をつぐために「文典程度ノ書」を學習したにすぎない。玄明は、南古萩町の自宅で療養していた青木周弼をたずね、「仮令民籍ニアル者ト虽モ志アル者ハ擢テ之ヲ明倫學館ニ収容スヘシ」と請願する。周弼が好生堂教諭役に任じられ、自宅で療養していた文久3(1863)年の秋のことである。オランダ語を習得し、「目的」を達成するためには、「明倫學館」、すなわち藩学明倫館の管轄下にある好生堂に入学しなければならないことをあらためて認識したのであろう。

II. 好生堂医生

玄明は、文久3(1863)年秋、好生堂教諭役の青木周弼の自宅を訪ね、陪臣や地下医にも好生堂への入学をみとめるよう請願する。周弼は、病氣療養中であつたが、すでに「入塾御育之諸生ハ、御醫師中、陪臣、地下醫共、御人差を以被_レ仰付_レ度候」と建言していた³²⁾。しかも、「好生堂御門内ニおゐてハ、平日之位級ニ拘らす、學業之深淺を以、席序黜陟被_レ仰付_レ度、學術進達之人々ハ、陪臣、地下醫たりとも、好生堂付込も被_レ仰付_レ候様ニ奉_レ存候」という徹底した能力主義にもとづく人材登用策とむすびついた建言である。

広瀬淡窓の咸宜園では、年齢、入塾まえの学歴、身分や家柄を顧慮しないという三奪法がとりいれられただけでなく、九級の月旦評にもとづく徹底した能力主義が採用される。淡窓じしん「文學ニ與_レラヌ他藝ヲナス者迄モ。往_レ此風ニ倣_レヘリ」³³⁾と述べているとおり、咸宜園の等級制の原理は豊後日田で私的に淡窓に師事した坪井信道、その門生である緒方洪庵などの蘭学塾にもうけつがれる。坪井信道の門生であり、緒方洪庵と同門である周弼が萩藩医学校に能力主義にもとづく等級制を導入しようとしていたことがうかがわれる。

周弼は、文久3(1863)年4月に教諭役に補任されると、みずからの西洋医学校構想の仕上げにすべての精力をそそぐ。それが結実したのが、7つの具体的な提言を列挙した建言書と「覺」、すなわち好生堂改正規則である。建言書は、攘夷を藩是とする萩藩が今後たどる荊の道程を想定し、萩藩医学校がはたすべき現実的な問題について提言したものである。萩藩医学校に藩内の医療行政を一元化し、戦時にも対応できるような態勢をととのえることが周弼の最後の建言の主旨である。このとき、玄明は「予モ亦既ニ同一ノ意見ヲ抱持スルニ由リ暫ク時機ヲ待ツヘシ」とさとされる。

文久3(1863)年12月16日、周弼が萩城下南古萩町の自宅で病没する。年があらたまると、周弼が起草した好生堂改正規則と建言は聴許され、陪臣や地下医も好生堂にうけいられることになる。周弼の没後、竹田祐伯と烏田敬蔵が好生堂教諭役心得を命じられる。元治元(1864)年3月には、世子広封の侍医青木研蔵が好生堂教諭役に任じられ、在職中は役人並に準じ、長柄傘の使用をゆるされただけでなく、萩藩医学校の職務が多忙のばあいには、城中の勤番を免じられる³⁴⁾。研蔵は、周弼と同様に強い権限を行使するのにふさわしい地位を付与され、好生堂改正規則と建言にもとづく改革を実施することになる。

すでに「陪臣輕卒藩士」³⁵⁾からなる奇兵隊が結成されていた。萩藩では、「舊習拘泥致候儀は人情之常態ニ御座候」³⁶⁾といった認識は影をひそめ、ひろく人材を登用することが藩の方針になりつつあった。

元治元(1864)年春、玄明は能美隆庵の推薦により好生堂に入学する。しかし、玄明は修学に専念することはできなかった。それは、萩藩が公武合体論から攘夷論へ、攘夷論から倒幕論へと藩論を急旋回させるなかで、好生堂もその渦中にまきこまれていたからである。安政

5年6月、幕府は孝明天皇の勅許を得られないままアメリカとのあいだに修好通商条約に調印する。この条約勅許問題は、天皇が幕府の国政上の先決権を否定したところに問題の核心があり、尊王攘夷運動の台頭と幕末維新の激しい政争の発端になる。萩藩は、嘉永6（1853）年8月、日米和親条約の締結について幕府から諮問をうけたさいには、「夷賊共之心膽を打挫き候程ニも堅く御斷被 仰聞」という攘夷論をつたえる³⁷⁾。幕府から日米修好通商条約の調印の可否について意見をもとめられると、安政5（1859）年5月、当役手元役の周布政之助が「叡慮の通異夷御拒絶」³⁸⁾、すなわち天皇の意向にしたがい修好通商条約の締結を拒絶するという方針をまとめ、藩論として幕府につたえる。

萩藩では、文久3（1863）年ころから俗論派と正義派と呼ばれるふたつの党派が政権をめぐり、熾烈な確執を演じる。それは、「守舊進取二思想の衝突」³⁹⁾にはかならない。俗論派は、ひたすら「宗祀の保全」をはかろうとし、保守的で、穏健な傾向をもつ。正義派は、「藩國を賭し偉勲を策する」ために、急進的で、過激な傾向をもち、尊攘運動から討幕運動へとつきすすむ。

文久元（1861）年3月、藩主慶親の側近であった直目付の長井雅楽^{うた}が開国策と公武合体策をかさねあわせた航海遠略策を建言し、藩論として採用される。航海遠略策は、朝廷と幕府から賛同をえる。しかし、文久2（1862）年1月には坂下門外の変がおこり、老中安藤信正が罷免され、公武合体運動は後退する。尊攘運動が全国的な規模に拡大するなかで、萩藩でも松下村塾グループを中心とする尊攘派、すなわち正義派が台頭し、航海遠略策を痛烈に批判する。同年7月初旬、藩主慶親が臨席し、京都河原町の藩邸で会議がひらかれる。会議は、桂小五郎、久坂玄瑞などの尊攘派が主導し、「天朝へ忠節幕府へ信義祖先へ孝道」という藩としての方針を決定する⁴⁰⁾。萩藩の藩論は、公武合体から「破約攘夷」あるいは「奉勅攘夷」に急旋回する。

京都では、朝廷の権威浮上を画策する攘夷派公卿が台頭し、萩藩の尊攘派とむすびつき、幕府に天皇親政による攘夷決行をせまる。11月、幕府は攘夷勅旨の遵奉を決定する。攘夷実行期限は、文久3（1863）年5月10日である。萩藩は、攘夷の急先鋒として中央政界の表舞台にあらわれる。文久3（1863）年4月16日、藩主慶親は攘夷実行をまえに萩城から山口中河原の御茶屋にうつる。攘夷期限の5月10日から26日にかけて、萩藩は下関海峡の砲台からアメリカ、フランス、オランダの艦船を砲撃する。

萩藩がまいた火種は、京都では、文久3（1863）年8月に鹿児島藩をはじめとする公武合体派の雄藩と公家の軍事クーデターを誘発し、萩藩は政治の表舞台になった京都から排斥される。それが、元治元（1864）年7月の禁門の変をさそい、さらに幕長戦争へと展開する。国元では、禁門の変から1ヶ月もたたない8月5日には英仏米蘭四カ国連合艦隊による報復砲撃をうけ、萩藩は降伏し、和議をむすぶ。

禁門の変により萩藩は朝敵になり、萩藩追討の勅命がだされる。萩藩では、守旧派、いわゆる俗論派が政権につき、幕府から提示された降伏条件をうけいれることによって幕府軍の追討を回避する。守旧派政権は、禁門の変をひきおこした福原元圃、益田親施^{ちかのぶ}、国司親相^{くに し ちかすけ}の3家老を自刃させただけでなく、萩藩を朝敵におとしめた急進派の重臣を処刑する。過酷な肅正に反発した高杉晋作が元治元(1864)年12月に亡命先の下関で挙兵する。それに呼応し、急進派は軍事蜂起し、1ヶ月あまりの内戦のすえに保守派の萩藩軍を撃退する。翌元治2(1865)年2月、急進派が政権に復帰し、実権をにぎる。3月には長府、徳山、清末の3支藩藩主の要請におうじ、藩主慶親は「外恭順、内武備充實」という藩是をしめす⁴¹⁾。それは、恭順を装いながら、軍備を充実させるという強硬論であり、幕府にたいする宣戦布告にほかならない。それが、慶応2(1866)年6月の幕府軍の萩藩への討伐派兵につながる。萩藩は討幕派の主導のもとで幕府の萩藩再征にそなえ、行政改革、軍事改革を推進する。

萩藩は、馬関攘夷戦をひかえ、文久3(1863)年5月に下関に赤間関病院を設置する。赤川玄樞が総督、李家文厚が副総督につき、20余名の医員が好生堂から派遣され、機器類も好生堂からもちこまれる⁴²⁾。好生堂では、同年11月から12月にかけて藩医のために外科医術の研修もおこなわれる。元治2(1865)年1月に好生堂に病院が付設され、四国連合艦隊下関砲撃事件、禁門の変、萩藩内での内戦における傷病兵や罹患者の治療にあたる。改元後の慶応元(1865)年4月には、竹田祐伯の建議により、諸隊附属の病院が廃止され、山口、高森、吉田に軍事病院が常置される。日野宗春が山口病院総管、江田東溪が高森病院総管、李家文厚が吉田病院総管に任じられる⁴³⁾。3つの軍事病院は、幕府にたいする宣戦布告を契機とする幕府の派兵を想定したものであり、好生堂病院御用掛に任命された好生堂医員が治療にあたる。

「吉田才判塀生村地下醫」三浦玄仲の嫡子玄明は、入学後わずか1年しかたっていなかったが、元治2(1865)年3月に「好生堂病院御用掛り」としてかりだされる⁴⁴⁾。明倫館と吉田宰判にも「添手紙」が届けられる。玄明にできるのは雑用だけである。

藩主慶親は、文久3(1863)年4月に山口中河原の御茶屋にうつり、6月には政事堂も山口にうつされる。藩政中枢の機能移転が計画され、好生堂も山口に移転することになる。玄明は、慶応2(1866)年1月、好生堂の山口移転をひかえ、好生堂病院御用掛を免じられる⁴⁵⁾。しかし、実際に好生堂が山口にうつるのは、萩藩と幕府とのあいだに幕長戦争の休戦協約が成立した同年9月のことである。玄明が好生堂病院御用掛を免じられたのは、山口の好生堂で医生として修業させるためである。好生堂は、当初、龍福寺境内にあったが、のちに後西門前に新築移転する。萩の好生堂跡地は病院として利用され、戊辰戦争の傷病兵をうけいれる。

玄明は、同年7月、「戦士之創傷療癒」のために召集され⁴⁶⁾、石州口の益田病院へでむき、藩医の佐方謙二の指揮下にはいるよう命じられる⁴⁷⁾。佐方謙二は、のちに鳥羽・伏見の戦い

が勃発したとき、上坂を命じられ、上国病院副督を命じられる⁴⁸⁾。

慶応2（1866）年10月、好生堂教諭役の青木研蔵は、つぎのようにかがひ、聴許される⁴⁹⁾。

此度好生堂山口江御引セ被_レ成、醫業一際御引立相成、御手廣人民之病苦御救被_レ仰付_レ候、就而ハ醫員成立之儀オ一之要務ニ付、其才判中地下醫之嫡子次三男等青年秀才之者選舉せしめ、好生堂入込修業可_レ仕様被_レ仰付_レ候事

8月21日には幕府に萩藩征討停止の勅命がだされ、9月4日には幕府軍は撤兵をはじめていた。しかし、好生堂医員だけでなく、地下医も傷病兵の治療にかりだされ、藩民の療養にあたる医者が払底していた。軍事的な対立は終息する気配もない。「醫員成立」、すなわち医者の養成は、好生堂の職分である。そのために、各宰判の地下医の子弟のなかから優秀なものを選抜し、好生堂に入学させたいという主旨である。入学生には、一人扶持が給与される。

好生堂では、医員だけでなく、医生もかりだされ、医者養成の機能を停止していた。萩藩討伐のための幕府軍が撤退しはじめると、山口にうつった好生堂は、玄明のような従来の医生や地下医子弟のなかからあらたに入学した医生のために授業を再開する。

玄明は、好生堂教諭役の青木周弼が起草・上申し、その没後の文久4（1864）年1月に認可されたばかりの好生堂改正規則⁵⁰⁾と7つの建言⁵¹⁾にもとづき入学をみとめられ、好生堂で修学する。第1に、周蔵が入学をみとめられたのは、つぎの第3の建言による。

入塾御育之諸生ハ、御醫師中、陪臣、地下醫共、御人差を以被_レ仰付_レ度候、猶、好生堂御門内ニおゐてハ、平日之位級ニ拘らず、學業之深淺を以、席序黜陟被_レ仰付_レ度、學術進達之人々ハ、陪臣、地下醫たりとも、好生堂付込も被_レ仰付_レ候様ニ奉_レ存候、右之輩一入相励、御醫師中も廉恥之心を生し、憤發致候様可_レ相成_レ哉と奉_レ存候事

地下医の家に生まれた玄明は、入学を許可されただけでなく、身分や地位ではなく、能力により席次がきめられる。学業が進達すれば、陪臣医や地下医でも藩医に登用される。好生堂には、徹底した能力主義がとりいれられる。

第2に、履修課程は原書課程と訳書課程というふたつの課程からなる。すでに漢方医学をおさめたものは、入学後ただちに原書課程に編入され、「文法書習讀」、「窮理書研究」、「三科之醫學」の順に修学する。まず、「文法書」によりオランダ語を習得する。「文法書」として使用されたのは、「文典」、すなわちマートシカッペイ文法書である。それは、オランダのマートシカッペイ公益協会（De maatschappij : tot Nut van 't Algemeen）が刊行したオランダ語文法教科書である。マートシカッペイ文法書は、箕作阮甫により翻刻され、天保13（1842）年に『和蘭文典』前編、すなわち『グランマチカ、あるいはオランダ語文法』（Grammatica, of Nederduitsche Spraakkunst）、嘉永元（1848）年には『和蘭文典』後編、すなわち『シntaxis、あるいはオランダ語の語形成』（Syntaxis, of woordvoeging der Nederduitsche Taal）として板行される。前編は「ガランマチカ」、後編は「セインタキス」と通称され、オランダ

語学習のための不可欠のテキストとして使用されることになる。オランダ語を習得したうえで、「窮理書」をまなぶ。「窮理」は、すなわち「事^{スジ}ノ理^{キハ}ヲ、窮メ知ルコト」(『新編大言海』)である。いわゆる自然科学が必修科目として位置づけられる。さいごに、下記の「三科之醫學」まなぶ。

第一科 解剖學

生理學

第二科 病理學

治法學

第三科 藥性學 附本草

分析學

「治法學」とは、「疾病に各自の正証傍症有て條理燦然として混淆せず、診問によりて症候を探索し、原因に遡洄し、病名を定め虚、実を辨し、死生を判ち、従て治則を設け、對應之方法を処する事を論す」学問⁵²⁾、すなわち診断学と治療学をかねそなえた学科である。「外科学」や「産科」も「治法學」にふくまれる。原書課程がいわゆる本科として位置づけられ、訳書課程はいわゆる変則課程にすぎない。玄明は、すでに漢学をおさめ、漢方医書も繙読していたために原書課程に編入され、まずオランダ語を習得しなければならない。玄明が能美隆庵のもとでどの程度「文典」をまなんでいたかあきらかではないが、好生堂でも「和蘭文典ニ精通スル烏田圭蔵氏等ノ教授ヲ受ケ」る。

烏田敬蔵は、天保元(1830)年11月、吉敷郡の鷺頭^{わしのづ}氏の次男に生まれ、9歳のころに父親をなくし、遺族とともに萩の烏田^{りょうたい}良岱のもとに寄寓する。良岱は、佐藤泰然のもとで外科学をまなび、高野長英の門で蘭学をまなんだともいわれる⁵³⁾。萩八丁南苑の御茶屋で医書の会読がはじまると、良岱は医学掛として『外科必読』、『解体新書』、『医範提綱』を講本にもちいる。西洋医学をまなんだ経歴がなければ、訳書にしても、西洋医書の会読を主宰することはできない。敬蔵は、良岱のもとで蘭学をまなび、嘉永6(1853)年5月に伊東玄朴の門にはいる。象先堂では、9年にわたりオランダ語と西洋医学をまなぶ。語学能力がひいでていたために幕府の蕃書調所の教授手伝の地位を用意されるが、萩にもどり、文久3(1863)年2月に烏田良岱の女婿にむかえられ、以後、圭三をなめる。同年4月18日に嫡子雇により召し出され、好生堂都講役を命じられる⁵⁴⁾。「都講」は「塾生のかしら」であり、「舎長」は「宿舍の長」である(『日本国語大辞典』)。敬蔵は、蕃書調所の教授手伝の候補にあげられるほどの蘭学者であった。

玄明は、『和蘭文典』を書写し、雑用のあいまにオランダ語の学習にはげみ、やがてオランダ語を習得する。『筆記』には、玄明のオランダ語読解力に関する挿話がみられる。

藩ノ名士大村^氏(益次郎)ノ知遇ヲ得ルニ至レリ、抑々大村氏ハ養祖父周弼ノ毛利家ニ

推薦セル者ナルカ、予ノ蘭学ヲ修ムルヲ聞キ、突然予ノ学力ヲ試験セント欲シ、一書ヲ予ニ交付シ、此ノ書ハ目下足下ノ研究スル医学トハ全ク没交渉ノモノナルモ、之ヲ足下ニ貸與スヘケレハ、此ノ書ノ序文ヲ熟讀シ、後日予ノ面前ニ於テ講義スヘシト云ヘリ、本書ハ「セバストポール」戦争ノ顛末ヲ叙述シタルモノニシテ、其ノ序文ハ文意難渋ニシテ、蘭学生徒ノ訳読ニ困苦スルモノナリト聞ヘタリ、予ハ各種ノ辞典ニ依リ漸ク其ノ大体ノ意義ヲ解スルコトヲ得タルノミナラス、此ノ書ニ由リテ軍事及ヒ政治思想ノ一斑ヲ窺フコトヲ得タルヲ以テ、中心非常ナル愉快ヲ感シタリキ、斯クテ予ハ大村氏ノ面前ニ於テ凡ソ三十行許通讀講義シタルニ、計ラスモ「大分讀メル」トノ賞辞ヲ受ケタリ

村田蔵六、のちの大村益次郎は、万延元(1860)年4月、御側医青木周弼の「育^{はぐみ}」として萩藩の士籍にくみいられる。「育」は、「他人を養子とし、又は養子となることで、家督とは関係なく、これによって立身又は縁付などの条件をよくすることを目的とする戸籍関係」を意味する⁵⁵⁾。

なんのための「試験」かあきらかではないが、蔵六は「目下足下ノ研究スル医学トハ全ク没交渉ノモノナルモ」と前置きし、「『セバストポール』戦争ノ顛末ヲ叙述シタルモノ」を玄明に手渡し、その「序文ヲ熟讀シ、後日、予ノ面前ニ於テ講義スベシ」と命じる。「此ノ書」はクリミア戦争に関する「大部之洋書」、分厚い蘭書であるが、詳細については管見にはいらない。

萩藩は、安政2(1855)年9月に好生館内に「台場築造、砲術、諸器械、其外洋製便利之事柄」を研究する西洋学所を開設する⁵⁶⁾。西洋学所は、安政6(1859)年8月に博習堂に改称し、独立した西洋兵学の研究教育機関に再編成される。博習堂では、松島剛蔵がクリミア戦争の「セバステボル戦争記」の翻訳にたずさわったことがある⁵⁷⁾。剛蔵は、文政8(1825)年、藩医松島瑞璠の長男に生まれ、のちに瑞益を名のる。萩藩医学校でまなび、周弼に異才をみとめられる。このころには、すでに嚶鳴社に参加していたとおもわれる。その後、江戸におもむき、4年間、坪井信道塾にまなぶ。当時、私塾に入門するさいには身元保証人が必要であった。保証人になるとすれば、周弼のほかにはいない。嘉永5(1852)年1月には、世子、のちの元徳の侍医（お鍼役）に任じられる⁵⁸⁾。翌嘉永6(1853)年4月、田原玄周の後任として西洋原書頭取役に任じられる。西洋学所が開設されると、能美隆庵、田原玄周とともに西洋学師範に任じられるが、ただちに長崎遊学を命じられる。安政4(1857)年7月には、西洋学師範に復職し、兵書を講じる。安政6(1859)年2月、「醫籍ヲ脱シ士班ニ列」し、瑞益から剛蔵に改名する。剛蔵は、萩藩海軍の創設にかかわり、文久元(1861)年2月には海軍局にうつり、文久3(1863)年10月には萩藩海軍頭取に任じられる。その間、御堀耕助、山田市之允（顕義）、品川弥二郎などとともに御楯隊を結成する。禁門の変、4カ国連合艦隊による馬関砲撃のち、保守派が実権をにぎると、剛蔵は野山獄に投じられ、元治元(1864)年12月19日に改革派

として政務にかかわった前田孫右衛門、毛利登人、山田亦助などとともに斬首される。

「セバステポル戦争記」の翻訳は難航し、剛蔵は9月11日付で藩政府につぎのようにうかがう⁵⁹⁾。建言がだされた年代は不明だが、瑞益から剛蔵に改名した安政6(1859)年2月から、刑死する元治元(1864)年12月までのあいだのものである。

青木周弼

又右衛門嫡子 戸田龜之助

右セバステポル戦争記、於博習堂翻譯被仰付候處、大部之洋書和解之儀は實以大業に而、中、壹人ニ而は容易に大成難相成候付、周弼龜之助兩人儀翻譯御用掛被仰付候ハ、諸事申談精、急速相調候様取計可申候間、此段被遂御詮議被下候様奉存候事

松島剛蔵

青木周弼の名があげられるのは、責任者である剛蔵には、「セバステポル戦争記」の翻訳事業が一大事業であるという認識があったにもかかわらず、萩蘭学界の権威まで動員しなければならぬほどに難航していたからである。「序文」だけでも「文意難渋」であり、博習堂の「蘭学生徒」はもとより、剛蔵も難渋していた。伺いは裁可され、赤川又太郎と土屋弥之助が「點削校正等仕候手傳人」を命じられる。玄明が翻訳を命じられた時点でも、訳了していなかったであろう。

クリミア戦争は、バルカン半島・中東への進出を企てるロシアとそれを防ごうとするオスマン帝国との対立が火種になり、嘉永6(1853)年10月に戦端がひらかれる。翌嘉永7(1854)年、オスマン帝国に荷担するイギリス、フランスがクリミア半島に出兵し、翌年9月にセバステポリ要塞を陥落し、年末には戦争は終結する。1856(安政3)年3月にパリで講和条約がむすばれるが、オスマン帝国もイギリス、フランスなどの西欧列強に従属することになる⁶⁰⁾。清がイギリス、フランス、アメリカの軍事力に屈し、従属させられる契機になったアロー号事件がおこったのは1856年10月のことである。

幕府は、毎年、長崎に入港するオランダ船がもたらす「別段風説書^{ふうせつがき}」により、クリミア戦争について情報をえていた。安政3(1856)年7月にもたらされた「別段風説書」の「魯西亜國并都兒格國」の項目には、つぎのようにしるされる⁶¹⁾。

先度之別段風説ニ申上候以後之別段ニ申上候、兼而相知可申候セバステポル魯西亜／
の地の南手ハ千八百五十五年第九月八日本卯年／七月廿七日同盟方⁵押収せられ候由ニ
御座候

ロシアの南下政策に端を発するクリミア戦争におけるセバステポリ要塞の陥落を報じたものである。ロシアは、寛政4(1792)年にラクスマン(Адам Эрикович Лаксман)を蝦夷に、享和3(1803)年にはレザノフ(Николай Петрович Резанов)を長崎に派遣し、幕府に国交と通

商関係を樹立しようと画策していた。その後、フヴォストフ事件（文化3年）、文化露寇事件（文化4年）があいつぎ、ロシアへの関心がたかまる。「北方與我蝦夷厖隔一衣帶水、其形勢情狀矣可不詳也」⁶²⁾、すなわちロシアは、日本の蝦夷と海峡によってへだてられた隣国である、そのロシアの実情をつまびらかにしなければならない、という認識があった。

嘉永6（1853）年7月、ペリーが率いるアメリカ東インド艦隊が浦賀に来航するが、その翌月、ロシア艦隊司令長官兼遣日使節プチャーチン（Евфимий Васильевич Путятин）が長崎に来航し、あらたに幕府に国交と通商関係の樹立をもとめていた。計画の実行にあたり、ロシア政府は、1853年はじめに、ヨーロッパにおける日本研究の第一人者であるシーボルトを首都サンクトペテルブルクにまねき、対日開国交渉のすすめ方について諮問する⁶³⁾。ペリーが江戸湾に回航し、強硬な示威行動により幕府に条約の締結をせまったのにたいし、プチャーチンは鎖国という幕府の対外封鎖政策を尊重し、長崎に寄港し、長崎奉行を介して幕府と交渉する。その後、クリミア戦争の勃発によりプチャーチンはイギリスやフランスの艦隊をさけ、沿海州に退去せざるをなくなる。じっさい、イギリス・フランスの連合艦隊は1854年8月（安政元年閏7月8日）にカムチャッカ半島を攻撃する。ペリーは、浦賀に来航した翌年、安政元（1854）年3月に日米和親条約を締結するが、プチャーチンは同年12月によりやく日露和親条約の締結にこぎつける。

萩藩でも、クリミア戦争が注目され、長崎に舶載された蘭書の翻訳がはじめられたのは、ロシアの南下政策にたいする脅威が認識されたためである。ロシアとトルコのあいだの紛擾の火種がくすぶっていた。維新後も新政府要員のあいだでは「魯西亞土耳其ノ豊隙將ニ端緒ヲ作セリ其禍患皇國ニ波及スルモ亦計リ難シ」といった認識が共有されていた⁶⁴⁾。

玄明は、好生堂に架蔵される辞書類にあたり、難解な「セバステポル戦争記」序文の「大体ノ意義」を把握する。数日後、蔵六に概要を説明すると、賞賛される。『筆記』には、「セバステポル戦争記」の序文を解説したことにより、「軍事及ヒ政治思想ノ一斑」をうかがいしることができた、とされる。しかし、わずか30行ほど解説しただけで、クリミア戦争の政治的・軍事的な意味を理解することができたとはおもわれない。

いずれにしても、玄明のオランダ語の読解力が群をぬいていたことがうかがわれる。玄明は、やがて初習者に「蘭語文典」をおしえるようになる。オランダ語を習得した先輩塾生が初学者の指導にあたるのは、当時の蘭学塾では慣例になっていた。のちに大学東校留学生として渡独する荒川邦蔵も、玄明のもとでオランダ語をまなんだ医師のひとりである。荒川邦蔵は、嘉永5（1852）年、萩藩士の家に生まれ、藩医荒川家の養子にむかえられる。慶応2（1866）年9月に萩から山口に移転した好生堂にすすむ。玄明は、翌慶応3（1867）年4月に長崎に派遣されるために、「文典」を教授したのは短期間であった。

玄明は、『和蘭文典』全編をおえ、辞書をひもときながらオランダ語原書を読解すること

ができるようになると、いわゆる本科にすすむ。『筆記』によれば、玄明は、好生堂在籍中、「文典以外ニ講究シタルハ單ニ一ノ医書ニ過サリシ」という。好生堂の原書課程は、「文法書習讀」、「窮理書研究」、「三科之醫學」からなる。玄明は、オランダ語を習得したのち、いわゆる自然科学課程にすすみ、すくなくとも「三科之醫學」の基礎医学、すなわち第一科にすすんだことになる。

萩藩医学校では、藩医のなかから優秀なものが教授スタッフに採用されるが、兼務するものも少なくない。のちの青木周蔵は日野宗春、半井春軒、竹田祐伯といった往時の教授スタッフと書翰をやりとりする。好生堂在籍中に教えをうけていたことがうかがわれる。

日野宗春は、文政10(1827)年に周防国大島郡久賀村の地下医山県玄敬の三男に生まれる⁶⁵⁾。天保13(1842)年8月より弘化元(1844)年2月まで周防国上関の小泉玄常に医術をまなび、同年3月より翌2年2月まで萩明倫館祭酒の山県太華のもとで漢学をまなぶ。同年5月より翌3(1846)年12月まで右田毛利家の時観園の教授太田稲香^{とうこう}のもとで漢学をおさめる。嘉永元(1848)年3月に青木塾に入門し、同4(1851)年8月まで在籍する。ついで、周弼の紹介により大坂の適塾に入門し、嘉永4年8月から同5年3月まで研鑽する。安政元(1855)年8月より翌2年3月まで長崎に遊学し、吉雄圭斎、中村洪庵などのもとで外科学をまなぶ。万延元(1860)年4月に好生堂舎長を命じられ、青木周弼の斡旋により萩藩医日野貞庵の養嗣子となる。万延元年11月、養父貞庵の卒去により家督を嗣ぐ。元治元(1864)年4月、山口病院総管に任じられ、好生堂助教を兼勤する。宗春にとって、青木家は師家にあたる。

半井春軒は、天保7(1836)年、萩藩士栗屋織之助の二男に生まれる⁶⁶⁾。天保15(1844)年に藩医半井玄友の養子にむかえられ、嘉永元(1848)年9月に家督を相続する。好生堂、安政5年、久坂玄瑞とともに江戸に遊学し、幕府儒官芳野金陵の門生になる。春軒は、安政2(1855)年2月、好生堂舎長に任じられ、文久元(1851)年8月に松岡勇記などとともに赤間関病院医員を命じられる。翌文久二(1862)年には長崎に派遣され、松本良順の門生になり⁶⁷⁾、オランダ海軍軍医ポンペの医学伝習にくわわる。慶応4(1868)年1月には病院総督を命じられる。

竹田祐伯は、文政8(1825)年、萩藩士深栖三郎兵衛の二男に生まれ、嘉永2(1849)年6月に藩医竹田庸伯の養子にむかえられる⁶⁸⁾。庸伯は、天保8(1837)年に大坂の高良斎門にはいり、嘉永3(1850)年ころには江戸の川本幸民に入門する。良斎は、7年あまり師事したシーボルト(Philipp Franz von Siebold)から「學術優秀」であるとして「許状」を授与される⁶⁹⁾ほどにオランダ語に堪能であった。幸民は、坪井信道塾において青木周弼と同門であった。祐伯は、高良斎のもとでオランダ語を習得した庸伯にまなび、のちに柴田方庵に師事する。方庵は、寛政12(1800)年に水戸藩領の会瀬村(現日立市)に生まれ、天保2(1831)年から死没する安政3(1856)年まで長崎にとどまり、開業し、私塾もひらく⁷⁰⁾。長崎を留守にしたのは、天保10年はじめころから4月まで江戸と郷里をたずねたとき、嘉永2(1849)年10月から

数ヶ月間牛痘摂取のために名古屋をおとずれたとき、翌嘉永3年2月から6月まで江戸におもむいたときの3度だけである。祐伯が方庵に師事したのは、長崎においてである。方庵は、オランダ商館医モーニケ（Otto Gottlieb Johann Mohnike）に牛痘接種法を伝授される。祐伯は、長崎の方庵のもとで牛痘接種法をまなんだであろう。その後、緒方洪庵の塾外生となる。万延元(1864)年7月、嫡子屋で召し出され、好生堂都講役を命じられ、文久3年4月には助教役、同年11月には御添匙格となる。同年12月16日に青木周弼が没したのち、烏田敬蔵とともに教諭役心得を命じられる。

萩藩の蘭学は、青木周弼によって基盤がきずかれ、しだいに裾野をひろげていた。草創期の段階では、周弼の蘭学塾をおえたものは、萩藩医学校でまなんだり、江戸や長崎に遊学したりした。周弼のつぎの蘭学第二世代、すなわち周弼などのもとで蘭学をまなんだ世代には、青木研蔵、田原玄周、田上宇平太、中島治平、竹田祐伯、松島瑞益（剛蔵）、日野宗春、松村玄仲（太仲）、烏田敬蔵（圭三）、半井春軒、赤川玄樸、久坂元瑞といった蘭学者がいる。東条英庵や手塚律蔵のように、幕府や他藩に招聘されるものもあらわれる。ちなみに英庵は周弼が藩医として萩にうつりすんだときにひらいた家塾の最初期の門生である。第三世代として、松岡勇記、福田正二といった蘭学者がそだつ。青木周蔵も第三世代に属する。周蔵は、重層化した萩藩蘭学の土壌のうえに屹立する萩藩医学校においてオランダ語を習得する。

Ⅲ．長崎遊学の藩命

玄明は、好生堂に入学し、2年もたたない慶応元(1865)年11月に内々に青木家の婿養子にむかえられる⁷¹⁾。表向きには青木研蔵の「育」になり、青木家に起居する。

青木周弼には、嘉永3(1850)年7月15日生まれの名男敏之介がいたが、その出生以前に実弟の研蔵を嫡子として藩に届けでていたために、研蔵が周弼の養嗣子として青木家をつぐ。研蔵は、継嗣にめぐまれないまま五十歳をむかえ、青木家の跡取りになる養子をさがしていた。研蔵は、はじめ門人の福田正二を候補者とする⁷²⁾。正二は、弘化3(1846)年、小郡宰判の地下医の子に生まれる。青木家の門人になり、研蔵のもとで研鑽する。好生堂が陪臣や地下医にも本格的に門戸を開放した文久4(1864)年春に、おそらく玄明の同期生として入学する。慶応2(1866)年9月に好生堂が山口に移転したのち、助教に挙用される⁷³⁾。そのころ、3歳年長の玄明は医生として好生堂に在籍していた。

福田正二は、研蔵のもとでオランダ語を習得し、西洋医学の基礎を身につけていた。『尼氏医鑑』（全8巻）、『弁葉則』（全2巻）といった訳著をのこしたことからうかがわれるように、正二は語学にすぐれ、後年、ドイツ語も習得する。『尼氏医鑑』の題言には、つぎのようにしるされる⁷⁴⁾。

此書ハ内科諸病ノ治法ヲ論スル者ニモ李瀾^{フロイセン}生國醫官尼^{ニーマイル}末乙爾氏ノ著ハス所ナリ。原本ハ

其第七版ニモ西暦千八百七十一年ノ鏤行ニ係ル。病門ヲ分テ十一類トス。曰呼吸器病、曰血管系病、曰消食器病、曰肝胆病、曰脾病、曰尿器病、曰生殖系病、曰神経系病、曰運動器病、曰皮病、曰全身病。其各門中一病毎ニ病理原由ヲ説キ、解屍所見ヲ載セ、症候経過ヲ掲ケ、終ニ治法ヲ擧ク。夫ノ叙事ノ明瞭議論ノ精確ナル如キハ、世ノ多ク知ル所ニモ、固ヨリ予カ言ヲ俟タス。予國語ヲ以テ譯セント欲シ、拮据一年、比口略其稿ヲ脱ス。題メ尼氏医鑑ト謂フ。今先ツ尿器病以下六門ヲ上梓シテ、世ニ問ヒ、次テ前ノ五門ニ及ハント欲ス。盖呼吸器病血管系病ノ如キハ、世已ニ翻譯鏤行ノ新書ニ乏シカラサレハナリ。予也鹵莽⁷⁵⁾、加之未タ曾テ文辭ヲ修メス。今唯原文ニ因循シテ、之カ譯字ヲ下スノミ。看官幸ニ其陋ヲ恕ノ原文ノ意ニ溯洄セハ亦濟世ニ少補ナシトセス。

『尼氏医鑑』は、ドイツ人内科臨床医ニーマイアー (Felix von Niemeyer) 原著の『内科診断学および治療学』(Lehrbuch der speziellen Pathologie und Therapie) ではないであろうか⁷⁵⁾。1871(明治3)年に刊行されたドイツ語原著の第七版から訳出したものである。ドイツでも版をかさねた最新の内科学書は、「病門」を11に分類し、それぞれに「病理原由」、「解屍所見」、「症候経過」、さいごに「治法」を提示する。原書は、佐藤尚中によって抄訳され、明治初年には『済衆録』として写本が流布していた⁷⁶⁾。明治5年に新宮涼民と新宮涼閣が「呼吸器病」の部分を共訳し、『仁墨兒内科則』として板行していた。福田正二は、新政府の大坂軍事医院に勤務したのち、帰藩し、山口医学校校長、みずから三田尻に開設した華浦医学学校の校長などをつとめ、終生、医者養成にたずさわる⁷⁷⁾。

もうひとりの候補が玄明である。のちの青木周蔵は、青木家への養子縁組について回顧している。

能美氏等ハ予ノ蘭学ノ知識漸ク進メルヲ見テ、予ヲ青木家ノ養子タラシメントセシカ、當時予ノ位置トシテ青木家ノ養子トナルコトハ太タ名譽ナルモ、予ハ三浦家ノ長男タルノ故ヲ以テ之ヲ辞退セリ、然レトモ交遊諸氏及ヒ能美氏ヨリ家嚴ニ対シ云々ノ説論アリタル爲メ予ハ終ニ青木家ノ養子トナレリ

玄明の養子縁組にさいし、玄明のオランダ語の最初の師匠である能美隆庵が中心的な役割を演じるが、「交遊諸氏」も関与する。かれらは、玄明を研蔵の養嗣子として推薦しただけでなく、玄明の父親玄仲の説得にもあたる。それは、玄明が語学において異彩をはなっていたためだけではない。玄明がひとを魅了する特有の風格をそなえていたからでもあるであろう。

日野宗春は、後年、毛利家編輯所維新史料編纂会常任委員の中原邦平との座談でつぎのようにこたえている⁷⁸⁾。

——今の周造は研蔵の弟子ですか

彼は河田了齋の弟子で大分出来たさうだからと云うので継だのだが本は三浦玄弘と

記たのだが

日野宗春は、平然と「河田了斎」の名をあげ、中原邦平も「河田了斎」が周知の人物であるのか、問い糾したりしない。「周造」や「三浦玄弘」は速記者の誤記である。人名に関しては、とりわけ口頭でつたえられるばあいには誤記や記憶違いがすくなくない。このみじかい会話から、玄明が「河田了斎」のもとでオランダ語をまなび、語学の才能を発揮したこと、それが、玄明が青木家に養子にむかえられる契機になったことがうかがわれる。中原邦平は、嘉永5（1852）年に宗春と同郷の周防国大島郡久賀村に生まれる⁷⁹⁾。宗春は、明治2（1869）年8月に故郷にかえり、開業する⁸⁰⁾。邦平が宗春に師事し、漢学を修業したのは、そのころであろう。邦平は、明治11（1878）年に司法省法律学校を中退し、参謀本部に出仕したのち、明治22（1889）年に毛利家編輯所にはいる。幕末維新期の萩藩に関する資料を収集し、『忠正公勤王事蹟』、『井上伯伝』、『伊藤公実録』などをあらわす。邦平と「河田了斎」との接点はみいだせない。「河田了斎」は、青木家となんらかのかかわりのある人物であり、青木家を師家とする宗春とは接点があったとおもわれる。

玄明は、豊後中津においては、オランダ語の訳書を繙読しただけであり、能美隆庵のもとではじめて「文典」、すなわちマートシカッペイ文法書によりオランダ語をまなぶ。玄明が「河田了斎」に師事したのは、能美隆庵の学僕であった時期か、好生堂に入学したのちか、いずれかの時期である。『筆記』は、その点には言及しないが、能美隆庵の学僕であった時期であれば、多忙な隆庵が日野宗春か青木研蔵に依頼し、「河田了斎」に玄明の指導にあたらせた可能性もある。好生堂に入学したのちであれば、烏田敬蔵のもとでオランダ語の手ほどきをうけたことになる。

青木家は、藩医としては新興であるが、原書主義を標榜する萩藩医学界の総帥である。養子の条件としては、第一に語学、とりわけオランダ語に堪能であることがあげられたであろう。第二に、藩医の家柄である以上、西洋医学の適性がなければならない。

福田正二は、ふたつの点で青木家の継嗣として適材であった。しかし、正二は「一身上の都合により辭して受けなかった」⁸¹⁾。玄明も、三浦家の跡取りであるとして辞退する。しかし、隆庵が中心になり、玄明の実父玄仲を説得し、玄明は青木家の養子という「名譽」を掌中にする。慶応元（1865）年11月に周弼の次女照子の婿として青木家にはいる。照子は、嘉永元（1848）年7月に生まれ⁸²⁾、当時、17歳であった。以後、玄明は青木周蔵をなめることになる。

玄明の青木家養子縁組についての伺いは、申請してから1年ほどのちの慶応2（1866）年12月13日付で萩藩政府から正式に許可される。以下がその申し渡し書である⁸³⁾。

青木研蔵、嗣子無_レ之付、研蔵育、実ハ吉田才判土生村地下醫三浦玄仲倅周蔵、業筋器用相見、往々御用ニ可_レ立者ニ付、智養子被_レ仰付_二被_レ下様御斷之趣相伺候處、如_レ願可_レ被_レ仰付_二旨候條、此段可_レ被_レ申渡_二候、恐惶謹言

周蔵は、地下医のせがれにすぎないが、医業にたずさわるものとして才能にめぐまれている。藩医である青木家の後継者としてふさわしい人材である。それが、周蔵が青木家への入籍をみとめられた理由である。青木家の養子にむかえられたのちにも、周蔵は好生堂で修学する。医家の名門の跡継として入籍した以上、家学の修業にはげまなければならない。しかし、周蔵は「講学ノ自由ヲ束縛セラルルノ感」をいだき、医学の修業に専念しようとしなない。「一二ノ医書」を繙読したとしても、それは「予ノ主トシテ修メントスル学問トハ頗ル遠キモノ」であった。その学問をまなぶためには、「笈ヲ海外ニ負フ」必要がある。それに、周蔵は「養父及ヒ大村氏等ニ就テ修業スルモ到底堂奥ニ達スルコト能ハサル」、すなわち医者としての能力の限界を感じていた。

周蔵は、すでに地下医の嫡子ではなく、萩藩医家の名門青木家の跡継ぎになっていた。医学研究の名目であれば、「歐洲留学」を願いでることも不可能ではない。『筆記』によれば、周蔵は海外留学を実現するために動きはじめる。

歐洲留学ノ希望ハ日ヲ逐フテ熾ナルニ至レリ、是ニ於テ予ハ医校ノ先輩竹田祐伯日野宗春等諸氏ニ説クニ、長藩ハ即ニ数名ノ学生ヲ歐洲ニ派遣シタルモ、此輩ハ執レモ兵学研究ヲ目的トスルモノ、如シ、然レトモ国家ノ必要トスル学科豈独リ兵学ノミニ止ランヤ、医学及ヒ衛生学ハ為政上最モ緊要ノ学ナリトノ趣意ヲ縷述シ、併セテ予ヲ歐洲ニ留学セシムヘク斡旋センコトヲ請ヒ、又木戸翁（孝允）ニ説クニ、同一ノ趣旨ヲ以テシ、且歐洲留学差許サルヘク尽力セラレンコトヲ懇ニ依頼シタリ

萩藩は、文久3(1863)年4月に5名の留学生をイギリスに密航させ、慶応元(1865)年4月にも南貞助、山崎小三郎、竹田庸次郎の3名をイギリスにおくりだす。鹿児島藩が町田久成、松村淳蔵、森有礼、吉田清成などの藩士をイギリスに密航させたのは、その2年後の元治2(1865)年3月のことである。翌慶応2(1866)年4月、幕府は「海外諸國へ向後學科修業又は商賣之爲罷越度志願之者願出次第御差許可相成候尤糺之上御免之印章可相渡候」⁸⁴⁾と布達し、9月に海外渡航事務をはじめ。7月には、鹿児島藩が藩士の海外派遣を申請し、佐野、佐倉、福井の諸藩も追随する。萩藩は、元治元(1864)年7月の禁門の変ののち、幕府とは敵対関係にあり、海外派遣を申請する必要もなかった。ただし、萩藩は攘夷期日とされた文久3(1863)年5月10日に攘夷実行にふみきり、アメリカ商船、フランスやオランダの艦船を砲撃していた。留学国は限定される。

萩藩は、慶応3(1867)年2月に毛利幾之進（親直）、福原芳山（鈴尾五郎）、河瀬安四郎（真孝）の3名をイギリスに派遣する。『筆記』は、執筆している時点から過去を回想したものである。「執レモ兵学研究ヲ目的トスルモノ」のなかには、周蔵と同時期に長崎に遊学し、慶応3年7月にイギリスに派遣された河北義二郎、天野清三郎などもふくまれる。かれらはいずれも「兵学研究」を課題とする。医生については、長崎に遊学生が派遣された前例しか

ない。中原玄快、上領道仁のふたりの好生堂舎長が長崎に派遣され、万延元(1860)年夏に幕府医官の松本良順の門人としてポンペの医学伝習にくわわる。しかし、「兵学」だけではなく、「医学及ヒ衛生学」も「国家ノ必要トスル学科」であり、「為政上最モ緊要ノ学」である。周蔵は、自説を開陳し、まず竹田祐伯や日野宗春に「歐洲留学」の実現のために斡旋を依頼する。祐伯や宗春は、たんなる「医校ノ先輩」ではない。いずれも萩藩の医療行政を主管する好生堂教諭の職にある研蔵を補佐する立場にあった。周蔵は、留学中の修学科目として「医学及ヒ衛生学」をあげる。

周蔵は、桂小五郎、のちの木戸孝允にも懇願する。小五郎は、慶応元(1865)年5月、政事堂用掛および国政方用談役心得に任じられ、藩政の中枢に参画する。以後、撫育方用掛、用所役、蔵本役といった藩の要職を歴任する。養祖父周弼は、小五郎の実父和田昌景とは藩医仲間、近所同志として親交があった。小五郎は、藩士の海外派遣に積極的にとりくみ、資金集めにも奔走する。青木家の跡取りに親しみをおぼえ、周蔵に援助の手をさしのべたであろう。のちの孝允は、1872(明治5)年8月にロンドンで面会し、ベルリン大学法学部に在籍する周蔵の見識に感動し、外交官の道をあゆませる。

『筆記』によれば、周蔵は「養父研蔵ニ請フテ兩三年間歐洲留学ノ許諾ヲ得」たうえで、藩庁に請願をくりかえす。請願は許諾され、慶応3(1867)年4月14日付で周蔵と松岡勇記に長崎遊学の辞令が交付される。

右醫學修業として肥前長崎被差越候付、月別金五兩充出立月別金五兩充出立月5往キ十二月分被立下候事⁸⁵⁾

周蔵と松岡勇記に命じられたのは、長崎におもむき、医学を修行することである。出立月から12ヶ月間、それぞれ毎月五兩が下付される。松岡勇記がどのような経緯で長崎遊学生に選挙されたかあきらかではないが、『福翁自傳』に「至極元氣の宜い活潑な男」として登場する⁸⁶⁾。松岡は、豊後日田の咸宜園から大坂の適塾にすすみ、すでに好生堂舎長の地位にあった。周蔵は、医生にすぎない。藩政府としては周蔵が長崎遊学生として適格か否か確認する必要がある。周蔵は、村田蔵六から「『セバストポール』戦争ノ顛末ヲ叙述シタル」蘭書の「序文」を熟読し、概要を講じるよう命じられたことがある。蔵六は、萩藩では「洋書ヲ讀ム」東條手塚二氏ニ勝レリ⁸⁷⁾ といった評価をえていた。蔵六は、オランダ語の能力を評価され、青木周弼の「育」として萩藩家臣団にくみいられる。蔵六が周蔵に難解な蘭書の翻譯を命じたのは、周蔵が長崎遊学生として適性があるか否かたしかめるためであろう。

研蔵は、長崎遊学の願書であったとしても、「歐洲留学」の願書であったとしても、好生堂教諭として好生堂に在籍する周蔵が提出した願書について決裁をくださなければならない立場にあった。周蔵が藩庁に請願したのは、「歐洲留学」についてであったであろうか。それが「歐洲留学」の願書であったばあい、研蔵は許諾したであろうか。青木家の養嗣子であ

る周蔵が「欧洲留学」について藩庁に請願したとすれば、研蔵は容認しなかったはずである。長崎遊学であれば、研蔵もみずから経験し、後進にも奨励していた。萩藩医のなかにも、西洋医学の修業の仕上げとして長崎におもむくものも少なくなかった。周蔵が西洋医学の修業にはげめば、長崎遊学をすすめたはずである。しかも医生の海外派遣は前例がない。周蔵が竹田祐伯や日野宗春だけでなく、木戸孝允にも「欧洲留学」の実現のために斡旋を依頼したとすれば、研蔵にもそれがつたわる。『筆記』には、「欧洲留学」の願書を提出したのは、好生堂に在籍中のことであったと記されるが、実際には長崎にたどりついたのちのことである。

周蔵が思い描いていたのは、まず開港場として外国航路の船舶が出入港する長崎におもむき、ヨーロッパ留学の機会をうかがうことであった。海外渡航が解禁になったのちの慶応3年7月以降、前年から長崎に遊学していた河北義二郎、天野清三郎などは、外国航路の船舶が出入港する長崎におもむき、長崎から渡欧する。

研蔵は、周蔵が「稟賦ノ醫者嫌ヒ」であることに気づいていた。長崎に旅立つさいには「変業セザル可シ」と諭す⁸⁸⁾。周蔵は、藩主毛利敬親に拝謁したのち、旅装をととのえ、6月はじめに長崎に旅だつ。長崎では、「薩人を介して崎陽學館及外人に就て泰西の學」をおさめることになる⁸⁹⁾。

おわりに

三浦玄明は、豊後中津において「福沢諭吉」に触発され、萩城下においてオランダ語をまなびはじめる。「福沢諭吉」との邂逅により、玄明はふたつの点で示唆を得る。ひとつは、外国語、すなわちオランダ語を習得することである。もうひとつは、習得したオランダ語により「西洋学」をまなぶことである。青木周蔵は、『筆記』第一を執筆するさいには『福翁自伝』をひもとき、諭吉の境涯にみずからの境涯をかさねあわせたことであろう。中津藩の下級武士の家に生まれた諭吉がのりこえなければならなかったのは「親の敵^{かたき}」でもある「門閥制度」である⁹⁰⁾。萩藩僻隅の地の地下医の家に生まれた玄明が克服しようとしたのは「封建制度ノ桎梏」である。

本稿では、『青木周蔵筆記』の記述を吟味しながら萩城下における三浦玄明の蘭学の修学過程をたどった。まず、冒頭にあげた問題点について整理しておかなければならない。

第1は、蘭学の修業のために萩城下におもむいた玄明が萩藩随一の蘭学者の家系である青木家の家塾に入門することなく、能美隆庵の学僕になった経緯である。『筆記』では、玄明が学僕の立場をみずからの意思で選択したようにえがかれるが、実態はつまびらかではない。自伝の筆者にとって重要なのは、玄明がどのような経緯で能美隆庵の学僕になったかではなく、学僕として、どのような体験をしたのか、である。『筆記』には、能美隆庵の学僕としてのふたつの体験がしるされる。ひとつは、オランダ語の学習過程である。隆庵は、もとも

と文人であり、「文典」を習得しているが、西欧の學術に造詣が深い人物ではない。オランダ語の教授法に熟達しているともいえない。しかも、侍医として公務多忙であり、オランダ語をおしえる閑暇もない。玄明は、本格的にオランダ語の習得にとりくむ必要性を認識する。

もうひとつは、隆庵が嚶鳴社のメンバーであったために、萩藩政府の要人でもあるメンバーの人びとの知遇を得たことである。嚶鳴社は、「援古徴今」の立場から歴史をまなび、時局問題をも講究しようという人びとが結成し、藩政にたずさわる要人を輩出する結社である。玄明は、隆庵の学僕として、オランダ語の習得という点では成果を得ることはできなかった。しかし、嚶鳴社の人びととの交遊は、「国家ニ益スル学問」、すなわち「政法ノ學」をまなび、「政治ニ参与スヘキ位置」を獲得するという「目的」につながる過程のひとつまにほかならない。

『筆記』が時系列でしるされているとすれば、玄明は学僕時代に奇兵隊への入隊を勧誘されたことになる。このころ奇兵隊などの諸隊にくわったものが、維新後の薩長藩閥政府の中樞になう。玄明は、「西洋学」を修学するために勧誘を謝絶する。文官としての道程をたどる起点である。

玄明が学僕の立場をみずからの意思で選択したとすれば、選択の基準があったはずである。それは、外国語、すなわちオランダ語を習得すること、すでに厭うようになった医業からはなれること、のふたつの基準である。玄明が萩城下におもむくさいに、種痘医である父玄仲からつたえられたのは、能美洞庵が好生堂教諭役として萩藩の医療行政を主管していること、好生堂助教として洞庵を補佐する青木周弼が萩藩随一の蘭学者であることである。玄明は、能美家は行政家、青木家は学者という認識をいだいていたのかもしれない。青木家の家塾に入門し、オランダ語を習得すれば、医業に就かなければならないが、能美隆庵の学僕になれば、オランダ語を習得することができるだけでなく、「目的」にちかづくこともできると玄明は考えていたのではないであろうか。

第2に、『筆記』が好生堂における修学状況や青木家への婿入りの経緯については詳細をかたらないのはどのような理由からであろうか。『筆記』が好生堂における玄明の修学状況に言及するのは、青木周弼および実弟の研蔵、烏田圭蔵の指導をうけたこと、「文典」をまなび、「単ニ一二ノ医書」しか繙読しなかったこと、村田蔵六の命令によりクリミア戦争に関する蘭書の数行を判読したことの3件だけである。しかも、前二者は、感情をまじえることもなく、淡々とした挿話としてえがかれる。しかし、蘭書判読に関するエピソードには情感がこめられる。蘭書の解説を命じたのは「藩ノ名士」の村田蔵六である。玄明は好生堂に架蔵される辞書類をひもとき、難渋な蘭文を解説する喜びをあげよう。蘭書を訳読することにより、玄明は「軍事及ヒ政治思想ノ一斑」をうかがいしることができ、「非常ナル愉快」を感じる。しかも、村田蔵六から賞辞をうける。わずか30行ほど解説しただけで、クリミア

戦争の政治的・軍事的な意味を理解することができたとはおもわれない。しかし、玄明のオランダ語の読解力が群をぬき、玄明が現在につながる方向性、すなわちオランダ語を習得するという課題を達成したことについては書きしるしておかなければならなかった。

青木家への婿入りの経緯についても、数行しか割かれぬ。能美隆庵などが、玄明がオランダ語学習において異彩をはなっていることを認識し、青木家の養嗣子に推薦する。玄明は三浦家の嫡子であるとして辞退するが、隆庵などが玄明の父親を説得し、青木家の養子にむかえられた、という文脈である。『筆記』は、そのことを「太タ名誉」と表現する。地下医のせがれが萩藩医、しかも名門青木家のあととりにもかえられたのは、社会移動という観点からは名誉にほかならない。「目的」から乖離するのではないかともおもわれるが、萩藩医の名門の後継者という地位を獲得したことは、いわゆる封建的身分制の軛から脱却する糸口をひきよせたことにほかならない。むしろ、封建的な身分制を超克するために、しかるべき名家に養子にはいるという選択肢をえらんだとみることもできる。

第3に、『筆記』には、玄明は青木家の養子にむかえられ、青木周蔵に改称すると、「歐洲留学」を企図し、ただちに日野宗春、竹田祐伯といった好生堂の中枢にはたらきかけただけでなく、藩庁に願書を提出し、木戸孝允に斡旋を要請したとするされるが、好生堂医生として実際に「歐洲留学」の願書を提出したのであろうか。

周蔵は、慶応3年6月に萩藩遊学生として長崎にたどりつき、20日もたたないうちに日野宗春にあて書翰をおくり、「遠遊」、すなわち海外留学についてはたらきかけはじめ⁹¹⁾。竹田祐伯から、来春に出崎を予定する木戸孝允に「自薦」するようすすめられたのは、同年7月か8月のことである⁹²⁾。周蔵は、好生堂に医生として在籍していた段階で、すでに好生堂の要職にある日野宗春や竹田祐伯に「歐洲留学」についてはたらきかけていた。萩藩は、文久3(1863)年4月と慶応3(1867)年2月に留学生を「兵学研究」のためにイギリスに派遣していた。医生については、海外へ留学生が派遣されたことはないが、万延元(1860)年にふたりの好生堂舎長が長崎に派遣された前例がある。周蔵は、日野宗春や竹田祐伯に説得され、長崎遊学を藩庁に願いでる。周蔵が木戸孝允に「歐洲留学」の斡旋を要請したのは長崎滞在中のことである。周蔵が好生堂在籍中に「歐洲留学」を企図したのはたしかである。

青木周蔵は、老境にいたり、往時を回顧する。そこに描きだされるのは、現在から照射された過去にほかならない。過去は、すべて現在に収斂されなければならない。そのために、恣意的に辻褄をあわせたり、必要以上に饒舌になったり、寡黙になったり、沈黙をつらぬいたりする。『筆記』第一には、「封建制度ノ桎梏」を超克するために「国家ニ益スル学問」をまなぶ基盤をととのえようという青年期の周蔵の野心をえがかなければならなかった。攘夷・倒幕運動の急先鋒である萩藩では、奇兵隊などの諸隊にはいり、軍人として頭角をあらわし、「政治ニ参与スヘキ位置」を獲得するものも少なくなかった。周蔵は、あくまでも文官とし

て「政治ニ参与スヘキ位置」を獲得したのである。

【註】

- 1) 『青木周蔵筆記』, 「青木周蔵関係文書」, 「国立国会図書館憲政資料室。『青木周蔵筆記』 第一からの引用については注記しない。適宜, 句点を付した。
- 2) 「解説」, 坂根義久校注, 『青木周蔵自伝』, 平凡社, 1970年, 348頁。
- 3) 小倉孝誠, 「自伝の構図」, 『東京都立大学人文学部人文学報』 フランス文学, 通巻246号, 1993年3月, 52～56頁。
- 4) 伊東栄, 『伊東玄朴傳』, 玄文社, 大正5年（昭和53年復刻, 八潮書店）, 134～135頁。
- 5) 『福翁自傳』, 慶應義塾編, 『福澤諭吉全集』 第7巻, 昭和34年, 125頁。
- 6) 「好生堂醫學引痘沙汰控」, 「毛利家文庫」, 山口県文書館所蔵。訓点筆者。以下, 山口県文書館所蔵資料には訓点を付す。
- 7) 同上。
- 8) 岡原義二, 『青木周弼』, 青木周弼先生顕彰会, 昭和16年（大空社, 1994年復刻）, 611～624頁。
- 9) 「蝦夷以来諸所病院出張医官功名名禄」, 「毛利家文庫」。
- 10) 田中助一, 『防長医学史』 上巻, 防長医学史刊行後援会, 昭和26年（聚海書林, 昭和59年覆刻）, 230～231頁。
- 11) 田中助一著刊, 『能美洞庵略伝』, 昭和16年, 16頁。
- 12) 『防長医学史』 下巻, 防長医学史刊行後援会, 昭和28年（聚海書林, 昭和59年覆刻）, 187頁。
- 13) 『能美洞庵略伝』, 17～18頁。
- 14) 「自然斎記」, 青木一郎編著, 『坪井信道詩文及書翰集』, 岐阜県医師会, 昭和50年, 305～308頁。
- 15) 『防長医学史』 下巻, 194～201頁。
- 16) 今村亮編, 『洋方医伝』, 明治17年（青史社, 1980年復刻）, 38～40頁。
- 17) 『青木周弼』, 465～466頁。
- 18) 坪井信道書翰, 小石元瑞宛, 弘化2（1845）年10月24日付, 「坪井信道と小石元瑞」, 『蘭学資料研究会研究報告』 第46号, 1959年4月, 64頁。
- 19) 『青木周弼』, 569～570頁。
- 20) 赤松範一編注, 『赤松則良半生談』, 平凡社, 1977年, 13～14頁。
- 21) 「好生堂醫學引痘沙汰控」。
- 22) 「明倫館洋学医学兵器船艦火薬事材料拔写」二, 「毛利家文庫」。
- 23) 周布公平監修, 「周布政之助年譜」 其一, 『周布政之助伝』 上巻, 東京大学出版会, 1977年, 4～5頁。
- 24) 坂上忠介編, 『杷山遺稿——口羽徳祐遺稿』, 田中治兵衛, 明治16年, 文求堂蔵版。
- 25) 『周布政之助伝』 上巻, 12頁。
- 26) 「學校問答書」, 日本史籍協会, 『横井小楠関係史料』 一, 東京大学出版会, 昭和52年（昭和13年初版）, 1～7頁。
- 27) 末松謙澄, 『防長回天史』 第3編下, 末松春彦, 大正10年修訂再版（『防長回天史』 四, マツノ書店, 平成3年復刻）, 287～288頁。
- 28) 田中助一, 「幕末における長州藩眼科医の子弟」, 『日本医事新報』 第2280号, 昭和43年1月, 106頁。
- 29) 鳥谷部春汀, 『春汀全集』 第2巻, 博文館, 明治42年, 2頁。
- 30) 小松緑編, 『伊藤公全集』 第3巻, 昭和出版社, 昭和3年, 170～171頁。
- 31) 『防長回天史』 第3編下, 169～170頁。
- 32) 「部寄」元治元年甲子正月分, 「毛利家文庫」。
- 33) 『懷旧桜筆記』, 日田郡教育会, 『増補淡窓全集』 上巻, 思文閣, 昭和46年（大正14年初版）, 138頁。
- 34) 「附記」, 『青木周弼』, 685頁。
- 35) 『防長回天史』 第3編下, 287～288頁。

- 36) 『青木周弼』, 551～558頁。
- 37) 東京大学史料編纂所, 『大日本古文書』幕末外国関係文書之二, 東京大学出版会, 明治43年(昭和47年覆刻), 260～261頁。
- 38) 『防長回天史』第2編(『防長回天史』二), 232～233頁。
- 39) 『防長回天史』第4編下(『防長回天史』六), 177頁。
- 40) 「親諭書」, 『修訂防長回天史』第3編上(『防長回天史』三), 316頁。
- 41) 『防長回天史』第5編上(『防長回天史』七), 92～94頁。
- 42) 『防長医学史』上巻, 243頁。
- 43) 同上書, 78頁。
- 44) 『忠正公伝』第21編, 第7章, 「両公伝史料」, 山口県文書館所蔵。
- 45) 同上。
- 46) 青木周蔵書翰, 日野宗春宛, 慶応4年1月9日付, 「日野家文書」, 「諸家文書」, 山口県公文書館所蔵。
- 47) 坂根義久, 『明治外交と青木周蔵』, 昭和60年, 刀水書房, 13頁。
- 48) 『防長医学史』上巻, 254頁。
- 49) 「諸窺書」慶応2年正月～慶応2年12月, 「毛利家文庫」。
- 50) 「部寄」文久4年元治元年。
- 51) 「部寄」元治元年甲子正月分。
- 52) 「好生堂増補規則」, 文久元年2月25日, 「部寄」文久元年。
- 53) 『防長医学史』下, 106頁。
- 54) 田中助一, 「烏田智庵先生と其の医系」, 『中外医事新報』第1227号, 昭和11年1月, 376頁。
- 55) 石川卓美編, 『山口県近世史研究要覧』, マツノ書店, 昭和51年, 129頁。
- 56) 「好生堂醫學引痘沙汰控」。
- 57) 『青木周弼』, 397～398頁。
- 58) 「松島剛蔵」, 「忠節事蹟」五, 「一般郷土資料」, 山口県文書館。「松島剛蔵事蹟」, 「志士列伝」一(列伝原本), 「毛利家文庫」。『防長医学史』下巻, 365～366頁。
- 59) 『青木周弼』, 397～398頁。
- 60) 『世界歴史』19, 近代6, 岩波書店, 1971年, 410頁。
- 61) 「安政3年7月和蘭人より申上候別段風説書」, 書写年不明, 大槻磐溪(写), 早稲田大学図書館所蔵。傍線部, 原文割注。斜線部, 原文改行。
- 62) 「叙」, 大槻禎重訳, 「俄羅斯国総記」, 林則徐訳, 魏源重輯, 『海国図志』, 嘉永7(1854)年, 蕉陰書屋, 早稲田大学図書館所蔵。
- 63) 保田孝一, 「ロシアの開国交渉とシーボルト」, 箭内健次・宮崎道生編, 『シーボルトと日本の開国近代化』, 続群書類従完成会, 平成9年, 169～170頁。
- 64) 末松謙澄, 『防長回天史』第6編下(『防長回天史』一二), 438頁。
- 65) 日野巖, 『日野宗春』, 日野稔彦, 昭和33年, 1頁。
- 66) 『防長医学史』下, 19～22頁。
- 67) 「登録人名小記」, 鈴木要吉, 『蘭学全盛時代と蘭疇の生涯』, 東京医事新誌局, 昭和8年(大空社, 1994年復刻), 283頁。
- 68) 『防長医学史』下, 10～11頁。
- 69) 高於菟三・高壮吉, 『高良斎』, 昭和14年, 高壮吉(大空社, 1994年復刻), 56～58頁。
- 70) 石島弘, 『水戸藩医学史』, 平成8年, ぺりかん社, 668～674頁。
- 71) 「青木周蔵戸籍」, 「青木家戸籍(写)」, 「青木家文書」, 道の駅「明治の森・黒磯」内とちぎ明治の森記念館・旧青木家那須別邸所蔵。
- 72) 『青木周弼』, 624頁。
- 73) 同上書, 623～624頁。
- 74) 「題言」, 尼末乙爾, 福田正二訳, 『尼氏医鑑』一, 二友社, 明治8年。『尼氏医鑑』は, 『弁葉則』とともに山口県立山口図書館に所蔵される。
- 75) 「ニーマイエル」, 日蘭学会編, 『洋学史事典』, 雄松堂出版, 昭和59年, 553頁。
- 76) ヘリキ・ホン・ニーマイル撰, 佐藤尚中訳, 『済衆録』, 明治3(1870)年, 源広世(写), 早稲田大

学図書館所蔵。

- 77) 吉田祥朔、『増補近世防長人名辞典』，マツノ書店，昭和51年，210頁。
- 78) 中原邦平質問，伊内太郎速記，「日野宗春翁雑談」，「毛利家文庫」。
- 79) 『増補近世防長人名辞典』，174頁。
- 80) 『日野宗春』，2頁。
- 81) 『青木周弼』，624頁。
- 82) 「青木テル戸籍」，「青木家戸籍（写）」，「青木家文書」。
- 83) 「青木周蔵宛辞令」，慶応2年12月13日付，「青木家文書」。
- 84) 「四月日欠海外航免許ノ布告」，「諸藩士留學請願一件」，慶応2年丙寅，通信全覽編集委員会，『続通信全覽』四八，類輯之部三二，藝學門，留學，雄松堂出版，昭和62年，459頁。
- 85) 『忠正公伝』第21編。
- 86) 52頁。
- 87) 「吉日録」，山口県教育会編，『吉田松陰全集』第7巻，岩波書店，昭和10年，480頁。
- 88) 青木周蔵書翰，半井春軒宛，明治3年月日不明，『防長医学史』下巻，23～24頁。
- 89) 『防長回天史』第5編下（『防長回天史』九），293頁。
- 90) 『福翁自傳』，11頁。
- 91) 青木周蔵書翰，日野宗春宛，慶応3年6月28日付，「日野家文書」。
- 92) 青木周蔵書翰，日野宗春宛，慶応3年8月18日，「日野家文書」。

Zusammenfassung

Der Lernprozeß von Shûzo Aoki vor dem Fahrt nach Deutschland 3 — über seine Erlernungszeit der holländischen Sprache in Hagi —

MORIKAWA Jun

Im Frühling 1863 begeht Shûzo Aoki nach Hagi. In Hagi beginnt Shûzo die holländische Sprache zu lernen. Um seinen Erlernungsprozeß der holländischen Sprache zu verfolgen, muß man sich an das “Notizbuch von Shuzo Aoki” anlehnen. In seiner Autobiographie spricht der Autor aber nicht immer nur die Tatsachen. In dieser Studie möchte ich seinen Erlernungsprozeß durch die Geschichtsmaterialien wieder erscheinen lassen.